
ユダメシキ！

川原白水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

「ダメシキ！」

【Zコード】

Z2492W

【作者名】

川原白水

【あらすじ】

普通の男子高校生、弼^{ひだめ}の家に突然現れた謎の美少女、織^{しき}。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなつた弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持っている様子。それはいったい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツーな弼の、成長する学園物語。

プロローグ もの1

ゆわゆわ。
むさむさむ。

体を揺すられて目を覚ます。

少女が、暗い部屋の中、ベッドの端に顎を置き、少年の体を揺す
つている。

「な……こ」

「その……。入れて……くれぬか」

少年の顔前には、じつと見つめる、一っぽれおちやうなほど大きな
目。

普段より、潤んだ瞳。

おねだりは、いつも、か細い声。

「またかよ……」

「そう、申すでない……」

「こここのところ、毎晩だよ?」

「わかつておるー……おなごに恥をかかせるでないつ

黒髪の美少女は、顔を赤らめながら少年を睨む。しかしすぐに恥
ずかしさで満ち、

「わかつておるのじや……。はじめてなのじや、こん……な……」
と、続けた言葉を口の中で溶かしてしまった。それほどまでに、
彼女の羞恥心は臨界点に達していた。

少年は軽くため息をついて、彼女の横で呆れ顔を作る。しかし心
の中では小さな優越感が自然と頭をもたげていた。彼女がこんなに
も求めてくるのは、このとき“だけ”なのだから。

ゆっくりと腕を伸ばすと、彼女はぎゅっと体を固くした。少年の
伸ばした指先が、ほのかに赤い突起に触れる。彼女は体を小さく震
わせると、少し恥ずかしそうに目線を逸らした。部屋に、静かに響

く、微細動する音。

少女は、頬を上気させて見つめてくる。

その恨めしそうな眉田に向かって、少年は冷静に諭す。

「少し待つて」

「わつ……わかつておる」

彼女の胸の高鳴りが聞こえてきそくながらい静かな部屋。そこに立つ音は、微細動する音と、彼女の荒い呼吸、そして 衣擦れの音。少女は、はやる気持ちを抑えられないのか、腰を左右に振り動かす。そのせいで、カサカサと行儀の悪い音が部屋に響いた。いつもは気高い彼女が、このときだけは理性より本能を優先させている。耳元で「はしたない」と囁いてやろうか。そんな嗜虐的な戯れを想起するほど、普段の彼女からは想像できないくらいに、身も、心も、乱れている。

あつ、もうすぐ……。

悦びに濡れた唇は、咲きかける薔薇のように小さく開いた。
喉の奥からこぼれる声。

「あつ……く……る……」

ジャジャジャ———ン！—

壮大な交響曲が部屋を満たした。

「きたああああつ！—！」

織^{しき}は喜びで叫び、弼^{むだめ}は怒りで叫んだ。

「いいかげんにゲームの電源の入れ方くらい覚えてくれよつ！——」

「を押すだけだろう！ こ・こ・を・押・す・だ・け！」

弼は眠気と闘いながら抗議するが、織は興奮してしまつてまるで聞いていない。

「ほっ、褒めてつかわすぞ、弼」

「まったく。お前がゲームをやるたびに起こされる身にもなれよ！」
六畳の狭い部屋に不釣り合いな32インチのテレビ画面には、新作RPGのタイトル画面が映し出されている。

「それで、ヒ。ここから、どうするんじやったかの」

「それも教えただろ。スタートボタンを押して」

「すたあとぼたん、は、この四角じゃつたか、三角じゃつたか」

「三角！」

弼は織からコントローラを奪つと、セーブファイルを選択するとこれまで操作してやつてから突き返した。二コ二コしながら「すまぬの」と、それを受け取る織。

ちくしょ「ひ、」のときだけカワイイのは反則だろ……。

弼はげんなりする。満面の笑みでゲームに向かう織は、普段の彼女ではない。

テレビにピンジャックを差し込み、ヘッドフォンで彼女の両耳をふさぐ。夜通し大音量で遊ぶ織と、そのせいで安眠を妨害された弼が、大ゲンカした結果に編み出した善後策だ。

織がゲームに没頭しだしたのを見届けると、弼はベッドに横たわった。暗い部屋にテレビ画面がチカチカと明滅する。その光を避けるように、薄いタオルケットを頭からかぶると、理不尽な何かから身を守るように身を丸めた。

おかしい。何かがおかしい。

健全な高校生男子としては、まるでラノベのようにおいしい展開だ。なにしろ家で寝ていたら、田の前に美少女がいて、その娘が自

分の部屋で寝起きを共にするようになったのだから。ここからハーレムでセクシャルでウハウハな生活が展開することを妄想したとしても、誰が弱のことを責められよう。

難を言えば口と態度の悪さだが、多少のシンなら弱にも耐性はある。そこからテレのお約束なら、初期のシンなどこへりでも我慢しようではないか。

それなのに……。

タオルケットに埋もれながら、二二数日、毎日思に続けてくる言葉を愚痴のように吐く。

「早く、帰つてくれないかな……」

理想とは、脳内で完結する快感だからこそ、理想とこうのだ。

プロローグ その2

「ヌシの願いを聞き届けてやつた
弼が織と初めて会ったのは、自分の部屋だった。悩み多き一六歳の少年が深い眠りから目覚めたとき、織は彼の枕元に立っていた。
第一声はもちろん織のもの。そのときの弼の返答は、以下のとおり。

「はふあ、へ……はの……あはは」

完全に寝ぼけていた。

「ヌシの願いを聞き届けてやつたと申しておる!」

織は容赦なく同じ台詞を不機嫌に叩きつける。そのおかげか、弼はようやく夢かまことかを疑うといひこれまで脳を起こした。とはいえたほどと同じように、

「はあ……え?」

と返事をするのが精一杯だったのは誰にも責められまい。
想像してみてほしい。眠りから覚めたとき、自分の部屋の枕元に誰かが仁王立ちしている。しかもそれはどうやら、古めかしい奇妙な和服を着た、黒髪の美少女のようだ。そして圧倒的な上から目線でいきなり怒鳴られている。

この戦術の天才を思わせる三段攻撃の手腕。武田信玄でも混乱するなどこりの話だ。

「どなたですか?」

弼はしそく正当な質問をした。しかし、正当な行為が必ずしも正当な結果につながらないと同様、彼の質問は彼の望む答えを与えてはくれなかつた。

「起きやれ! ボケウド!」

返ってきたのは聞いたことのない罵声だつた。結局彼女は自らを

「織」と名乗つたが、どこの誰で、なぜここにいるのかといった、
基本的な説明責任が果たされることは無かつた。そして彼女は、当然
然のじとく弼の部屋に居座るつもつみつけだつた。

数日後、弼は考えた。

これはもしや、ラノベにありがちな展開を利用した、新手の詐欺
か。オレオレ詐欺ならぬ、ラノベ詐欺とか。

まてよ。もしそうだとしたら、裁判の時に有利になるのは記録だ、
と誰かが言つていたな。よし、こういうことは早く手をつけたほう
がいい。彼女から受けた仕打ちを、箇条書きにまとめておこう。
以下は、弼の渾身の被害レポートである。

- ・寝起きに、しかも初対面に、いきなり人生について説教される。
- ・突然機嫌が悪くなり、食事と飲み物を買ってこいとパシラされる。
しかも自費。
- ・帰りが遅いだの食事の選択に趣がないだと舌の貧しさを説教さ
れる。
- ・テレビとゲームに興味を持たれる。
- ・テレビとゲームについての原理的な説明をさせられる。
- ・説明が下手だの語彙が足りないだと国語力の低さを説教される。
- ・新作のゲームを持ち主より先にプレイされる。
- ・織、ゲームにハマる。プレイは三日三晩続く。
- ・出て行くように低姿勢でお願いすると、恩と義理についてぐじぐ
じと説教される。
- ・毎朝毎晩ゲームで遊ぶ上にわからないことがあると就寝中もおか
まいなしに質問される。
- ・織が寝ているのを見たことが無い。
- ・弼だけが重度の寝不足になる。

というわけで、今に至る。

……なんだこりゃ。

弼は自分で書いたメモを見て唖然とした。ただのケンカじゃないか。この箇条書きを裁判官が証拠として採用したとしよう。検察はあまりのレベルの低さに責め、織の弁護士は勝利を確信して小さくガツッポーズをするだろう。金銭的な被害も、パシラされた数百円が最高額で、その後は自分の夕飯を分け与えている。

勝てない。この裁判は決して勝てない。

「誰か、なんとかしてくれないかなあ……」

弼は他人任せなつぶやきを吐いた。当然、それで事態が好転するはずもなく、すでに数日が経過している。あの日以来、弼は何度もこれまでの出来事を思い返してはため息をついていた。

そして、とある出来事の回想で、必ず身体が固まる。

記憶とは、悲喜こじらぎもを無造作に詰め込んだ引き出しのようなもの。だが中身のほとんどは、ため息をつきたくなる類のものばかりなのだ。

第一話（一）心の穴（前書き）

普通の男子高校生、^{ゆだめ}弼の家に突然現れた謎の美少女、^{しき}織。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなつた弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持つている様子。それはいつたい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツーな弼の、成長する学園物語。

第一話（1） 心の穴

第一話（1） 心の穴

大きさではなく、^{ゆだめ}弼の人生を変えた事件があつた。

あれは、ちょうど三週間ほど前の高校からの帰り道のことだ。

弼は一駅離れた共学の私立高校に自転車で通っている。この地域ではトップクラスの成績をおさめる進学校だが、弼はその中で可もなく不可もない成績に甘んじている。

その日もアスファルトの照り返しでうだるような暑さの中、自転車でだらだらと住宅街の坂道を登っていた。帰宅部の下校時間はまだ陽も高く、日差しは目にも肌にも痛い。部屋でクーラーの風に身をゆだねる快感を想像しながら、とにかく自転車のペダルを憎々しげに踏み続けていた。

坂の途中にはこの春に更地になつたばかりの空き地がある。

弼は、ここを通りかかるたびに、今でも後ろめたさを感じる。

管理者がすさんなのが、長らく空き地だつたせいで誰も遠慮しないのか、そこには誰のものとも知れぬ古くなつた自転車が何台も捨てられていた。たかだか数百円の粗大ごみ料金をケチり、廃棄物を放置する輩というのは、どこにでもいるものだ。

弼は一度、そこから自転車を盗んだことがある。自分の自転車のタイヤが帰宅途中にパンクし、徒步で押して帰らざるをえなかつたときだ。出来心で自分の自転車を空き地に放置し、見知らぬ自転車に乗り換えて家に帰つた。

こういうとき、男は得てして小さな手柄を立てたような、屈折した快感に浸るものだ。ご多分に洩れず弼もそのタイプの男であつた。不法に捨てられた自転車をリサイクルしてやつてるんだ。僕は褒められることをしているのだ……。自らの不法投棄は遠くの棚に放り

投げて、過去に誰かが乗っていた自転車のペダルを漕ぐ。

しかし、帰宅してきた父親と家の玄関の前で鉢合わせしたとき、弼はみつともないくらいに動搖した。その動搖と見知らぬ自転車を交互に見た父親は、不肖の息子に対して実に明快な態度をとった。静かに、しかし断固とした口調で「家に入るな」と告げ、これみよがしに扉に鍵をかけたのだ。そのガチャリという音が、弼の胸の中で何倍にも大きくなつて反響する。

体格は中肉中背、普段から溫和で高圧的などころの全くない人である。その父親に關係を拒絶するような態度をとられたことは、反抗期を終えたばかりの弼にとって、ショックだった。

自分でも罪には気づいていた。だからこそ弼は、自転車を元あつた空き地に戻しに行くことにした。とはいえ、誰かのせいにしなければ行動に移せないあたり、まだまだ精神の幼い弼である。

「ムカつく……」

この場合の文句の矛先は、当然父親だ。とはいえる文句を言いながらも、盗んだ自転車には乗らずに徒步で押していく。それが弼のせめてもの矜持だった。

一時間後にパンクした自転車を引いて家に帰る。恐る恐る扉に手をかけると……玄関の鍵は開いていた。扉を開いた弼が最初に目にしたのは、玄関に腰を下ろした父親の姿だった。どうみても磨く必要の無いピカピカの靴に、べつとりとクリームを塗りながらこやかに手を動かしている。そして「おかえり」と笑顔で言った。

弼は、何よりも自分がみじめな人間に思えて、ただいまの一言すら言わずに一階への階段を駆け上った。

それからというもの、毎日この坂を通るたびに、ホロ苦い思いをする弼である。

弼の乗る自転車がちょうどその空き地にさしかかったとき、尻ポ

ケットの携帯電話がブブブブブ、と震えた。弼は坂の途中で自転車を止めて苛立ち混じりに取り出す。ウインドウを見ると、苛立ちは疑問に変わった。そこには市外局番を含めた見慣れない番号が表示されていたのだ。

「もしもし」

「ああ、もしもし。明里 弼くんの携帯ですか？」

「はい、そうですが」

携帯に出た相手は、遠慮がちな、しかし芯の太そうな大人の男性の声だった。

「私は、明里くん、つまり君のお父さんの会社の者だけど……突然電話してしまって申し訳ない」

弼は、じわりと押し寄せる悪い直感に全身が構えるのを感じた。「実は、ちょっと話があるんだが、落ち着いて聞いてくれるかな「まさか……。直感は、不吉な確信へと変化していく。

「大変言いにくいんだが……」

「父に、何かあつたんですね」

その質問は、ほとんど確認だった。

「う、む。君のお父さんがね、仕事中の事故で亡くなつた」

やはりそうか。

真っ先に頭が納得した。

次いで心が震えるか、と思ったが、なぜか、いつまで待つても静かだつた。弼は自分の心が動かないことに、おや？ と首をかしげた。

「大丈夫かい」

「あ、すみません。大丈夫です。あの、母には」

「ああ、先ほどお伝えしたよ。当然のことなんだが、少々感情的になられてね。お話ができなくなつてしまつたんだ」

この人は、声の向こうで困惑した表情を浮かべているに違いない。悪い人ではなさそうだ。

「（）迷惑をおかけしました」

「いや……。それで、言いづらいんだが、お母さんと一緒にご遺体の確認に来てほしい。西鳥居総合病院だが、場所はわかるかな」

「調べて伺います。あと、あなたは」

「私の名は、埜多家。のだけ埜多家たいそう泰藏だ」

「知った名だ。この地域では有名人と言つていい。

「わざわざ、ありがとうございます。家に帰り次第、母と向かいます」

「ああ、病院で待つてるので案内しよう。……弼くん、君は強い男だな」

やけに感心した声だった。母のように取り乱さなかつたことへの感謝か、それとも部下である父を死なせた罪悪感の裏返しなのか。どちらでもよかつた弼は、再びお礼を言つて電話を切つた。

その後の段取りは埜多家氏のおかげでスムーズだつた。あつというまに通夜から葬式、火葬場、埋葬場所まで手配が終わる。弼と彼の母親は、病院の廊下のベンチでただ座つていればよかつた。

その頃からだろうか。弼は胸のあたりにもやもやとした不快さを覚え、何かが欠落してしまつたような違和感につつすらと氣づきだしていた。

弼のその悩みは、通夜の席に座つたとき、深刻な域に達していたことが判明する。

おかしい。まったく涙が出ない。

悲しさも、寂しさも、どこかに置き忘れてきたみたいだ……。

父親の遺体と対面したときも、遺品の整理を手伝つたときも、こみ上げてくるものがなかつた。母親はといえば、あれ、母さんつて父さんのこと、そんなに好きだつたつける？ と聞きたくなるほど何度も泣き崩れている。

それなのに自分ときたら。いくら実感がわからなくても、限度というものがある。

周囲が悲しみで沈む通夜の席で、自分が泣けないというのも、意外と面倒なものだ。能面のように無表情でいれば、無頼を決め込んだように勘違いされ、不遜ととられかねない。少し窮屈だが、弼はとにかくうなだれてやり過ごすことにした。

同じ高校の制服姿が焼香に訪れると、意味もなく恥ずかしさを感じる余裕すらあつた。そのときも顔を上げることはせず、同じ型のローファーが歩み行くのを眺め続けることで気を紛らわせた。へえ、靴の履き方ひとつで、ずいぶんと性格が出るものだな、と妙なところひで感心する。

葬式も終わつてあつといつまに数日が過ぎる。

弼はその日だけでなく、翌日の葬式も、その後も、まるで他人事のように、涙が出なかつた。

一階の台所の食卓では、連日、母親が萎える心を奮い立たせながら雑事をこなしていた。葬式と香典の収支と礼状書き、喪中はがきのリストづくり、遺産相続の手続き、そして、就職活動。

心から嘆き悲しんでいる母親が生活といつリアルと闘つているのに、自分は父親の死とリアルに向き合えていない。その後ろめたさから、せめてリストづくりくらいは、と勇気を出して手伝いを申し出た。しかし母親は、

「なにかしていいないと、辛いの」

と笑顔を作ろうとして失敗し、唇をかんで声を震わせた。

弼は、初めて見る“憔悴した親”といつ生き物が怖くなり、それから一度と手伝いを申し出なかつた。

あれから三週間は経つたが、弼はずつと、心に大きな穴が空いているみたいに、ぽつかりとしている。涙はその穴からこぼれおちていて、涙腺まであふれ出てこないのでないか。弼はそう考えることで、無理にでも自分を納得させることにした。

「なんなんだよ、いつたい……」

ため息交じりにつぶやきながら、タオルケットをはねのけて仰向に大の字になる。織が遊ぶゲーム画面のせいで明度が頻繁に変わった部屋に、父親が死ぬ前と何も変わらない月光が差し込む。

そういえば、葬式が終わってからこのかた、二階の自分の部屋から出でていない。夏休み中であることも手伝って一寸のほぼすべてをここで過ごしている。何をしていたのかよく思い出せないが、一度読んだマンガを機械のように繰り返し読むことで時間を消化していた氣がある。

一週間ほど前、楽しみにしていたゲームが宅配便で届いた。パッケージの封を切ることまではしたのだが、その後まったく気のりがせず、ゲーム機本体の横に立てかけたままにしていた。それを持ち主より先にプレイしているのが、そう、飛鳥時代のような和服を着た、言葉遣いのおかしな彼女だ。

ちらつと様子を見ると、床にべつたりと座りながら、脇を全開に広げて、キャラクターを移動させるたびに全身を傾けつつ、嬉々としてコントローラを操っている。ときおり、はつ、だの、ほつ、だのという掛け声のあとに、ああ～っ、という落胆の声が聞こえてくる。まだあの細い橋を渡ることができなくて、川向うの街にすら行けてないんだな。弱は何とは無しに彼女の後姿を眺めた。

初めて会ったときは、頭の上にハートマークが乗ったような、あまり見たことの無い髪型をしていた。だが、とある事件をきっかけに髪型は今のものに変わった。と言えばいかにも流れるように合意が得られたように聞こえるが、実際には“些細な”交渉があったのである。

「なぜじやー なぜ予が結いを変えねばならぬー」

「このヘッドフォンは密閉型つて言つて、けつこう重いのー。頭にちゃんと渡さないと、お前みたいに長時間プレイするヤツはもんのすごく疲れるのー」

「それくじこ我慢すると申しておひつー」

「まつー

「なつ、なんじゅ、なぜーイヤカル」

「昨日、お前は偉そうにこいつ言ったよな。『ソラシドアゴに渡せばよ

よからう。人たるもの、ソのよつに機転を利かせねばならぬ』」

「……それはもしや、ソのロマネカ」

「それがどうだ。案の定途中でお疲れになつた」と様子で

「……ぬつ」

「我慢しきれずにピンジャックを引っこ抜いただろう！ 真夜中に爆音が鳴り響いて、さすがに母さんが部屋をのぞきにきたじゃないか！」

「すぐに隠れて事なきを得たではないか！ まつたく男の子のクセに終わつたことをグジグジと。まるで爽やかさが足りぬ！ まるで健やかさが足りぬ！ 部屋でコロコロと食つて寝るかの毎日を過ごし、あげくの果てに予にハツ当たりとはー。あーあー情けない！ ヌシはモテぬじゅるうー。なあ、そうじゅるうー！」

勢いよくまくしたてるが、これっぽつけも反論になつていない。これはもう、子どもの負けず嫌いだ。当然、弼が納得するわけもない。

「僕のパーソナリティについて文句があるなら後日たあっぷり聞く！ しかし今は別だ。前科のあるヤツが何を言つても無駄！ 髮型を変えないならゲームを売り飛ばす！」

「んぬつ……ぐつ……ゲームを盾に予を齧すかつ！」

「それくらこしないと、言つことを聞かないだろつー！」

「今までどおり、予の言こなりでおればよいではないかつー！」

「なぜ僕がこんなにも反抗するんだと思うー。お前のいいなりになつた結果、血尿が出るくらいフラフラだからだよツツー！」

実際、弼は三日三晩続いた織のゲーム祭りのせいで、体力的に限界にきていた。

織は顔を真っ赤にして、弼をいつも齧していた凶悪な手つきでこらみつけてくる。いつもなら争い」とを避けてすぐに諦める弼も、しかし今回ばかりは引き下がらない。僕の安眠のため！ いつまで

もこいつの言いなりになつてたまるものか！

しばらく睨み合いは続いたが、弼がまつたく引き下がらないことに気づいたのか、織は突然諦めたように横を向いて吐き捨てるように言った。

「わかつた！ わかつたわい！ まつたく……おなじを恐喝すると
は、ヌシも見下げる果てた男の子よ。」

彼女はすくと立ち上がった。小柄だが、例の妙な和服を着ているせいで体型はいまいちわからず、年齢は不詳だ。少し幼く見える丸顔だが、目は大きく鋭く、口元はきゅっと結ばれ、とにかく気の強さを感じさせる。あごを引き、斜めに弼を見おろす立ち姿は、小柄な仁王像を彷彿とさせる。弼が織を心の中で“プチ仁王”と呼んでいるゆえんである。

織は、頭頂部に結っていた髪の紐を緩め、無造作にかるく頭をひとふりした。

まるで、そこだけ重力が緩んだかのように、豊かな黒髪がスローモーションでふわりと舞つた。

えつ！ ……待て。今、目の前に立つてるのは……。

弼は彼女の立ち姿に、陶然と、口をだらしなく開けたまま、頬を染めて見蕩れた。

見蕩れていることに気づいても、なお見蕩れてしまつほど、それは抗いがたい感情だった。

目線を、動かせない。なんだこの吸引力は。

不覚つ……！ ちくしょう！ かわいいじゃないかッ！！

纖細で、艶ある黒。波打つ漆黒の豊かな髪が、まるでマントのように肩にふわりとしなだれかかる。首から腰にかけて身体にまとわりつく様は、胸に黒猫を抱いているかのように思わせるしなやかさ。数本が濡れた唇に付くと、鋭い目つきと相まって、幼顔に似合わぬ色気を醸し出す。

む、無念。

初めて女性にこうも見蕩れた弼にとって、それは、全身が粟立ち、胸がざわつくほど、新鮮な経験だった。少女だと思っていた相手が実は女だったことに気づかされたような、そんな甘酸っぱい衝撃。弼は彼女のなかに狼狽したのだ。

一方の織は、何が恥ずかしいのか、明らかに照れていた。

「ほ、ほれ、要望どおりほどいたぞ」

「……」

「弼つ！」

「えつ……あ、ああ。じゃあ、ヘッドフォンを……」

意識を奮い立たせて、ヘッドフォンを手に近寄る弼。しかし彼女は突然、汚いものを見るような眼差しをして、突然胸の前を両手で押さえ隠しながら避けるように後ずさった。

「なんだよ。急に」

「ヌシ、目が妙にイヤらしい……寄るな。氣色悪い」

「氣色……悪い、だと？」

「はつ……ははつ……。グッバイ、短いつきあいだったな、『陶然

』。

” よお、おかえり。帰つてたのか、『激怒』。

弼は心で擬人化したふたつの感情に、別れと再会の挨拶をした。出戻りの感情が、弼に親指を立ててゴーサインを出す。『さいごうぜ、兄弟！』

「イヤらしいってなんだよッ！ 失礼なヤツめッ！」

「さては、予があまりにも美しくて見とれおつたろう！ 汚らわしい！ 身の危険を感じる！ もうよい、予がやるからよこしゃれ！」

倍返しの勢いに、弼の激怒クンが尻尾を巻いて逃げ出した。しかも半分は図星だったため、言い返すまでに半拍の間が空く。これでは織の罵声を認めてしまったも同然だ。

「か、勝手にしろ」

むくれてヘッドフォンを差し出す弼。

手荒く受け取った彼女は、弼に背を向けてヘッドフォンをもぞもぞと頭にかぶる。が、長い髪が邪魔をするようではまく被れず、悪戦苦闘している。

「な、んじゃ、いたいっ！ 髪が挟まる……」

手伝つてやるものか、と完全に無視を決め込むつもりだった弼だが、片目で様子を観察していると、ヘッドフォンと格闘する織の姿が少し滑稽に思えてきた。

「髪、結べばいいじゃないか」

ボソッと言つたつもりの言葉は、思った以上に織を刺激したようだ。彼女はキッと眼光鋭く全身で振り返り、体を前に傾ける勢いで怒鳴つた。

「ヌシがほどけと言つたのであるオオッ！…！」

「やつ、そうじやなくてさ」

弼は、今まで恐怖しか感じることのなかつた、真つ赤になつて怒る彼女の顔が、実はそこまで怖くないことに気づいた。口調からは卑屈さが抜け、自然に話せるよつになつたようだ。

「じうじう風に結べば、髪が落ちてこなくていいんじゃないかな？」

雑誌のグラビアページを開き、水着姿でにっこりほほ笑むポーネールのアイドルを指さす。チラリと水着写真を見た彼女は、勢いよく後ずさつて慌てふためいた。

「ぬなあつ！？ ち、乳がつ、あ、脚がつ、はみ……はみ出で……」

「反応を予測はしていたものの、ちよつと面倒な気分になる。

「あのね……」

「おなごの肌もあらわな姿を見せて、どうせこことこのじゅう！」

「……どうもじつもねえよ。髪型つて言つてゐるだら」

照れもせず突き付ける弼。仕方なしに近寄つてくる織。

「ヌシらの常識はどうなつておる！ 現世の男の子もおなごも、恥辱も、劣情も、脚も、ち、乳も、いつも隠さぬほど心が歪んでおるのか……」

弼から雑誌をひとつたぐるよつに奪い取ると、眉根に嫌悪感を表したまま、じつくりとページを見始めた。

「くつ……見るもケガラワシイ絵よ。だいたいなんじや、この面積の狭い衣は……。女ともあらう……ものが……」

その変化は突然訪れた。

織の表情が徐々に消えるとともに、声はとぎれとぎれに小さくなり、あれほど嫌がっていたカラー・ページで腰をくねらせるアイドルを凝視し始めたのだ。

「なつ、ひつやつて後ろでひとつに束ねていれば、ヘッドフォンもしゃすいだろ」

弼が話しかけても黙つて雑誌を握りしめている。

「おい、織。何か言えよ」

「つむき氣味の織を下から覗き込むと……。

えつ……！？ 弼は、心臓が一瞬、跳ねるのを感じた。

「……ひ

あの織が、声を押し殺して、雑誌を凝視したまま、目に涙をためている。

「……うつ

嘘だろ……。だつて、部屋に突然現れて、理由も必然性も説明しないまま、まるでタチの悪いヒモのように数日間棲みつき続けているんだせ。面の皮の厚さは大要塞の鉄門扉にも負けないと思つていたのに……。泣いてる……？ あの織が……本当に？

驚くのと同時に、疑問が湧きあがる。

なぜ？ ヒツヒツ？ 僕は何か、まことにを語ってしまったのだろうか。

織よ、ヒツヒツ結つとよ。

なんじや、結びづらい結いじゃの。

そなたはいつも文句ばかりだの。よいかり早づ結え。……お

お、そうじや。その姿じや。

吉よ……おかしゅうは、ないか？

なんの。怒ると鬼の形相のそなたが、天女に見えるわ！

吉！ 言い過ぎじや……。

はははっ、鬼の織でも照れるか！ これは趣深い！
ば、バカモノ……。

頭の中で、さわやかで優しそうな少年が、織の名を愛しげに呼ぶ。追憶にたゆたう、嬉しくも恥ずかしい一人だけの時間。色鮮やかな幸福の景色は、くつきりと思い出せる分、余計に織の心を無惨に切り裂く。

「き……ち……か……よお……」

織は震えた声で誰かの名を呼んでいる。

そのか細く消え入りそうなつぶやきは、弼の心に迫るものがあった。彼には想像もできないくらいの悲しみを、この小さな体で、必死に抱えているのだろうか。

だが反面で、弼は少しうらやましくもあった。

こいつは、何かをこんなにも嘆いている。

でも……僕は……。

自分の「泣く」という感情の欠落に改めて失意を感じた弼は、小さく震える織をただ見つめるしかできなかつた。心の冷めたい男が、熱い涙を流す彼女に、何かをしてやる権利など無いのではないか。そう思った弼は、小ねく「うめん……」とつぶやくしかできなかつたのだ。

弼の言葉が聞こえたのか、織はハツと我に還る。両手の袖で必要以上に目を拭くと、取り繕つように明るく振る舞いだした。

「う……む。この髪型は、なかなかじゃの！ 確かに首まわりも涼しげじや」

目元も赤いまま、無理に笑顔を作った織は、さつそく髪を手で束ねて、後ろで結ぼつと試みる。弼は、いたたまれない気持ちでその

姿を見ていた。

「きち、つて、誰だよ……」

弼は、ゲームにいそしむ織の小さな背中に向かって、ぼそつと尋ねた。少し結び慣れたポニー・テールの上には、例の密閉型ヘッドフォン。緊迫感あふれる戦闘シーンのBGが漏れ聞こえてくる。

弼は、両手を枕代わりにしながら、カーテンを開け放した窓を見やる。狭い角度の夜空にうつすらと天の川がかかつていた。

誰かが、天の川についてこう言っていたのをふいに思い出す。

「願いを叶えるのは、流れ星でも、ましてや天の川でもない。自分自身だ。願いを叶えると誓つた自分を、空から見届けてくれるようにお願いするのが、七夕の短冊なんだよ」

数瞬して、記憶が鮮明によみがえった。

ああ、死んだ父さんの言葉だ。でも、それがいつだつたのか、自分はそのとき何歳だつたのか、まったく思い出すことができない。思いだそうとすればするほど、暗い霧が脳内を覆う。

しばらくして、弼は、ゆっくりと穏やかな眠りに墮ちていった。

「無邪気な顔をしあつて……」

織は小さく息をたてて眠る弼を見下ろし、ベッドに腰を下ろした。

「遙かに小者のくせに、分不相応な願いを誓つたものじや」

誰と比べているのかはわからないが、厳しい言葉とは裏腹に、口調は慈しむように優しい。

「よいか、予は聞き届けにきただけじや。叶えるのはヌシの力じや。勘違ひせぬようにのつ」

織はいたずらっぽく弼の鼻をつついた。弼は小さく身じろぎし、しばらくしてまた寝息を立てる。

「ヌシは予の結いを解かせ、新たな結いを『えた。……責任は、とつてもらつぞ』

小さく囁いた織の頬は、少し赤かった。

恋は、一度の人生で何度も終わる。それが人間である証拠だ。
たいていは別れにあざを作り、あざが癒えたころ新たな恋をする。
だが、同じ個所に何度も大きなあざを作った者は、恋に臆病なら
ずにいられるのだろうか……

第一話（2） 心の穴（前書き）

普通の男子高校生、^{ゆだめ}弼の家に突然現れた謎の美少女、^{しき}織。とある出来事のせいで自分の感情を整理できなくなつた弼。織は遠慮の無い言葉と態度でそんな彼の生活を変えていく。やがて真理をついた喝を繰り返す織に、弼は弱気な心を突き動かされ。一方、彼女は他にも目的を持つている様子。それはいつたい何なのか。彼女の過去は一体……。ツンな織とフツーな弼の、成長する学園物語。

第一話（2） 心の穴

第一話（2） 心の穴

日が昇ると、部屋の気温はみるみるうちに上昇した。いつのまにか深い眠りに落ちていた弼ゆだめだが、時とともに増す寝苦しさに、少しうんざりしながら目を覚ます。ヘッドフォンが効を奏し、織もゲームに慣れたおかげで、真夜中に起こされることもなく、寝不足は解消された。それでも、猛暑の陽光はクーラーの冷氣を突き抜け容赦なく弼を襲い、安眠を妨げる。

眠気を帯びた気だるい気分のままテレビの方を見ると……今日もいた。変な和服の少女、織しきはゲーム画面を前にヘッドフォンを外し、髪を縛る紐を結び直していた。

「どう……したの」

「なんじゃ、ようやく起きやつたか。朝寝が過ぎるぞ」

後ろ手で髪を束ねながら肩越しに振り返った織の第一声は、相変わらずシンシンした物言い。

「ヌシの勧める結いは、確かに便利じゃが、すぐに解けるのじゃ」「え、ポニー・テールが？」

「その“ほにい”てえる”じゃ。他のおなじはどう結つてあるのかのお……」

少し困った風な織。へえ。女の子にはそんな悩みがあるんだな。弼は妙なところで感心した。

弼は、過去にポニー・テール姿だった身近な女性を思い浮かべてみて、急に落ち込んだ。彼の周辺には常に一人の女性しかいなかつたのだ。

第一に思い浮かんだのは、母親。彼女がポニー・テールに結わくときは決まって家事をする前だ。背中まである髪が、炊事の邪魔になるのだらう。でも、彼女が髪を結び直しているのを、弼は見たこと

がない。

第二に思い浮かんだのは、近所に今も住んでいる幼馴染みの、眞ま幌庭みきな。弼の唯一の女友達である彼女は、今でも同じ高校の同じクラスに通っている。父親が大企業のお偉いさんとかで、何不自由なく育つた、いかにもなお嬢様だ。そのふんわりとした大人しい性格と清楚な印象を与える顔立ちは特に男子生徒に人気が高く、彼女にファーストネームで呼ばれている弼は、クラスの男どもから羨望と嫉妬のまなざしを浴びている。その視線は常に煩わしいが、時に誇らしくもある弼であった。

彼女も幼いころからボニー・テールがよく似合った。長く艶があり真っ直ぐな髪質は、織の髪に似ており、だからこそ弼は織にボニー・テールを勧めたのかもしれない。高校生になつてからは滅多にしなくなつたが、それでも体育や家庭科の授業のときに、たまに束ねている様子だ。小学生くらいまではよく一緒に走り回つたもので、彼女も、遊んでいる最中に髪が乱れて結び直す、ということは一度もなかつた気がする。

「コップがあるのかもしれないな。母さんに聞いてみるよ」
きつといなけれど、と心でつぶやく。ただ、何か飲みたかつたこともあって、弼は一階に降りることにした。

「母さん」

いないと知つた上で、台所に声をかけてみた。わかっているのに返事がないと、少し寂しくなる子供のような弼だった。

冷蔵庫から冷えたアルカリ飲料を取り出してコップ一杯分を飲み干してから、居間を見回す。壁にかけてあつた紺のスーツが無い。母親はこの猛暑の中、働き口を探しに出かけている。一方で息子は、夏休みという名の自堕落生活を送つていて。

特に強い覚悟の上ではなく、高校を辞めることも考えてみた。しかし、しばらくしてその考えは弾けた。弼は頭を軽く振る。その選択は誰も幸せにならないことに気がついたからだ。

台所に戻り、アルカリ飲料をもう一杯コップに注ぐと、それを持

つて一階に上がる。

弼の部屋では、ポニー・テールをなんとか結び直した織が、またゲームで遊んでいた。その側に無言でコップを置くと、弼は織の後ろ髪を眺めながら、そうだ、と手をたたいた。

「みきなに聞いてみればいいんだ」

反射的に携帯電話をとりあげるが、いざ使おうとすると待ち受け画面が真っ暗だった。そりやそつだよな、充電してなかつたし。弼は電源ケーブルを携帯本体に直接差し、窓から外を眺めながら電話した。

数回のホールドで、みきなは電話に出た。

「も、もしもし……」

「あ、みきな？ 弼だけど。ちょっと教えて欲しいことがあって」

「もう…」

みきなの柔らかい声が、突然、弼を責めるように尖った。

「な、なに？」

「どうして連絡くれなかつたのー？ 度ども電話したし、メールもしたのにー！」

「え、あ……」

もしかしたら、携帯の電源が切れているときに連絡をくれたのだろうか。

「心配したんだからー お父さん」「くなつて……氣を落としているんじや、ないかつて……」

みきなの声が少しづつ小さくなつていぐ。

「ごめん。心配かけた」

「何か、あつたの？」

「携帯の電源、切れてた」

「……そんなことだと思つてた」

呆れたというよりは、ちょっと笑つている声に聞こえた。

女の子ってどうしてこうも口口口口と態度が変わるんだろう。さつきまであんなに怒つていたくせに。

弼は、女の七不思議の一つに触れた気がした。

「もう大丈夫?」

「ん、大丈夫。ありがとな」

「そう、よかつた……」

みきなは幼稚園に通っていた頃から心配性で、少しでも弼の表情が曇っていると、どうしたの、なにがあったの、としつこく聞いてきたものだった。高校に入つてからはそこまで頻繁に話す機会も無かつたので、みきなの性格を半ば忘れていたが、こうして小言を言われるときを思い出す。

同じ幼稚園に通っていた頃の弼にとつては、口うるさい母親がもう一人いるようなもので、ありがた迷惑な存在だったみきなだが、小学校の高学年に差し掛かる頃からどんどん大人びてきた。そのため、弼が彼女に対して幼馴染み以上の感情を抱くようになるのは、自然な流れだつただろう。肝心のみきなは幼稚園の頃から変わらぬ小言魔だつたが、それは昔からの惰性の延長線上にあるものなのか、それとも少しばかりへの好意が混じつているのか、弼には判断がつかなかつた。

ただ、思春期まつさかりだつた彼は、そんなみきなを迷惑がる態度をとりつけた。それは、恋心ゆえの幼い照れ隠しで、みきなの気持ちを斟酌する余裕など無かつただけなのであるが、それを彼女がどう受け取つたのかはわからず、次第に互いの口数も減り、高校受験も重なつて、中学二年の夏ごろから、ほとんど接点が無くなつていた。

再び会話が成立したのは、奇しくも同じ高校の合格発表の掲示板前。

「おめでとう、やだめ

「……みきなも」

「ちょっと、やせた?」

「徹夜続きだつたから、そうかも」

「もう、睡眠と食事は抜いちやダメだよ。おばさん心配するよ」

「うん」

みきなは相変わらず口うるさかつた。しかし弼は、久しぶりの小言が嫌じやなかつた。彼女の昔の小言を思い返し、すべては自分のことを心配してくれた言葉だったことに、改めて気づいたのだ。みきなも弼と久しぶりに接点をもてたことが嬉しそうで、自然、二人は一駅分ある帰宅路を歩いた。肩を並べながら数年分の溝を埋めるように、昔話に華を咲かせる。それは過去の恥ずかしい笑い話が大半で、受験が終わつた開放感もあつて、お互いの笑い声が弾けた。自分の恋心はひとまず脇に置いて、みきなを大切な幼馴染みと認識したのは、このときからである。それは友情以上恋愛未満の感情で、押しつけがましいものではなかつた。そのため、現在も二人の間には適度な距離があり、みきなの小言を聞く機会は少ない。だからこそ彼女の言葉は、弼にとつてとても大切なことがある。

だから、父親の死に向き合えていないことや、涙を流すことができないことなどは、口が裂けてもみきなには言えない。言つた途端、急遽、家に押しかけて来る可能性すらある。今、家に来られると、面倒なのが一人……。

あれ。織がテレビの前にいない。弼は、大して広くも無い部屋の中を見渡す。

「何をしておる」

「わっ！」

織は弼と一步しか離れていない真正面にいた。背が小さいため、視界に入らなかつたのだ。

じつと見上げる彼女の顔を見て、弼の背中を冷たい汗が流れた。嫌な予感がする……。上目づかいの織の目線は、弼に向いていない。そしてこの独特なキラキラした表情を弼は知つてゐる。テレビとゲームに食いついたときのそれと同じだ。

「もしもし、ゆだめ？ どうしたの？」

「あ、いや、なんでもない！」

この台詞を吐くとき、たいていは、なんでもないでは済まないこ

とが多い。

「誰かいるの？」

「いやあ、いないよ、いない。ヒジリでわつ……えつ……おつ、ち
よ……な……」

織が携帯を持っている腕にぶら下がつて耳を近づけてきた。それを咎めて「おい、ちょっとなにするんだよ」と言おうとして、みきなに気取られないよう、「ばかっ」はばかつた。

織は受話口から音が漏れ聞こえるのに興味を持つたらしく、弼の横に顔を寄せてくる。

「ばかっ、織っ、近い！ とにかく顔が近すぎる！」

他者の体温を顔面で感じた経験の無い弼にとって、少々キツめとはいえ美少女に寄り添われる行為は、顔面の発火とパニックの点火に十分だった。

全身から脂汗を流しながら、近寄つてくる織の顔を引きはがそうと押しやるが、力を入れれば入れるほど織はさらに力を込めて弼にからみついてくる。声にならない格闘が続く。

「……ゆだめ、なんか変」

「う、ごめん、電波がおかしい！ かけ直す！」

慌てて電話を切る。そして……。

「電話の最中に何してんだッ！」

いつもの喧嘩がスタートだ。

「でんわ、というのか、この小さな箱は」

織は、弼の手から携帯電話を奪い取った。液晶ディスプレイを見て「小さなテレビじゃ！」とひとしきりはしゃぐと、裏返してみたり、ボタンを押してみたり、ためつすがめついじり倒す。

「先回りして言うとだな、遠くに離れた人と会話をするための道具だよ」

「そんなことは、先ほどのヌシの様子を見ていれば、よほどの阿呆でもないかぎりわかる」

「圧倒的に一言多い。」

「予が知りたいのは仕組みじゃ」

「仕組み……って。電波とか、周波数とか……そういうことか？」

「残念なことに、弼にはその手の知識が無い。無いものは、説明のしようがない。」

「なんじゃ、男の子のくせに情けないのぉ」

「男とか女とか関係ないだろ。携帯電話の仕組みは、作った人に聞いてくれ」

ふん、とバカにしたように鼻を鳴らすと、織は携帯電話を弼に投げて返した。テレビやゲームほどの衝撃は無かつたのか、飽きるのが早い。そして、携帯を手放すのと同時に、声は低気圧を帯びる。「で、誰と話しておったのじゃ。おなじの声のようだつたが」

「真幌庭みきな。僕の幼馴染だよ」

「なんと！ ヌシにおなじの知己があつたのか！」

目を丸くして驚く織。確かに生まれてこのかたモテたことはないが、そこまで驚かれると弼も面白くない。

「悪いからよ。これでも小さい頃は仲良かつたんだぞ」

それを聞いた瞬間、織の眉が短くけいれんした。自慢げな弼の表情が癪に触つたのだ。

「ほおおおおっ！ これは意外じゃ！ まったく、いつさい、おなじには相手にされぬ男の子と思つておつたのに、ビビにそのような甲斐性を持ち合わせておつたのか」

「お前なあ……」

「こいつの口は、僕をけなすために付いているのではないか。」

「しかしなんじゃな！ そのみきなとやらも、ずいぶんとモノ好きであることよ。弼のような、財力も腕力も知力も無く、やる気も根気も負けん気も、なああんにも無い男の子と話をして喜んでおるなど、どうかしておる。趣味が悪いとしか言いようが無いのー！」

「こまでは、またはじまつた、と流していた。しかし。

「きっと、みきなとやらも、大したおなじではないのじゃろ？」「この言葉に、弼はカチンときた。心の奥底で火打ち石が鳴る音が

する。

その瞬間だつた。織はピクンと体を固まらせ、何かを感じ取つた
ような顔で弼を見つめた。

「どうしたんだ。あれだけ水道の蛇口のよつて勢によく僕の悪口を垂れ流していたくせに、急に固まつたように動きを止めるなんて。」この表情……初めて見る。例えるなら、よつやく受信したラジオの周波数を、正確に合わせよつとする田つきだ。田に見えない何かに、焦点を合わせようと集中しているように見える。

あまりにも長くジッと見つめるため、弼も少し不審がつた。

「な、なんだよ」

その言葉に、織は急に命じがいつたよつてうなずいたかと思つて、眉をつり上げ口角を引きつらせて意地の悪い笑みをたたえ、まるで挑むように睨みを利かせた。

「ヌシはどんでもない勘違いをしてある」

「何をだよ」

「真幌庭みきなの」とじや。どうやらヌシはみきなことを悪からず思つておるよつじやが、あのような性悪に十数年も瞞され続けるとは、ずいぶんとお人好しよの」

「……なんだと?」

「……なんじや、納得いかぬか。ではこれから、あやつの本性を予が言い当ててやろう」

一呼吸置いた織は、惡意の棘を散りばめたしなやかな言葉の鞭を、弼に向かつて力一杯振り下ろし始めた。

「ヌシはあの優しい素ぶりにまんまと騙されておるよつじやがの、あれはヌシを慰めることで上から見下しておるのじや。父親を亡くし、苦境に立つヌシを慰めるのは、なんと心地よいことかのおー。自分より下の人間を慰撫するのはじや。それはそれは心地よい快感があることじやろつ。『わたしは人を氣づかう優しい娘でござります、なんて氣高く美しいのでしょうか』とな

なんだ。なんなんだ。この織から発せられる憎悪は。

「人前で優しく振る舞えば、周囲はきっとアヤツを見上げることであらうよ。『なんとお優しい方か』と。そう言われば言われるほど、あの女は自己陶酔してゆくのじや。なんと心地よい、皆がわたしを崇める、と。あの優しさは、己が生きやすい境遇を作りあげるための、単なる擬態じや」

反論したい。しかしそれを上回る驚きが弼を支配する。

「ヌシのほのかな好意もアヤツはとうに見抜いておるだ。それを利用してヌシに優しく、馴れ馴れしくしておるのじや。やちらのほうが得じやからのお！ 人を見下せるからのお！ なにせヌシは常にアヤツの下で蠢く下等生物じやからのお！ …… どうじや。ここまで説明してやれば愚鈍なヌシにも見えてきたであらう。あの女は、計算高く、小心で、虚栄心の強い、損得で動く、九尾の狐のようなおなじよ」

えぐるように、見下すように、みきなを罵倒し続ける織。

弼は、怒りよりも数倍強く、驚きの感情が心を支配した。どうして会つたことも無い相手をここまで断定的に悪く言えるのか。彼女の怒りを誘発したのは、みきなどの部分なのか。

一方の織は、軽蔑した聲音で、スラスラとみきなの悪口を連ねる。心にも無い笑顔は保身のため。下賤な女ならではの卑屈な態度。行く末は詐欺師か売女か。

織が彼女を貶めると、弼の怒りは幾何学的な倍率で増幅していく。驚きの感情はとても強いものではあつたが、それを怒りが追い抜くのは時間の問題だった。

そして。

「所詮、あやつはクズ女じや」

「の言葉が決定的だった。弼の背中から怒氣が陽炎のように立ち上る。

「ふざけんなよ……タダ飯食らいの居候が……。言つていいことど、

悪いことがあるぞ……」「

「ほう！なんじゃヌシ、怒つたか。“力”も“氣”も無いヌシが怒つたか！」

「……当たり前だ。僕の悪口はともかく」

「詐欺狐の悪口は許せぬか！」

「……ツ！」

弼は強烈な怒りの波動を放つた。その表情を見た織は、両手と口角を挑発的に釣り上げる。

その時。

織の釣り上がった瞳が、燃えさかる炎のようにチラチラと赤く光り、弼の瞳を捉えた。

「……！」

「な、なんだ。目が……光っている！？　ば、化け物……！」

「なんじゃ、ビうした。怖じ氣づいたのか。ヌシの怒りはその程度か」

怯んだ弼をあざ笑うように、織が挑発する。

人間ではない。見た目は少女でも、人の言葉を発しても、この正体は、他のナニカだ。宇宙人か、物の怪の類か、はたまた怨霊か。その化け物は、なぜか弼の大事な幼馴染みを、言葉の限りを尽くして地の底まで貶めようとしている。

…………そうだ。こいつは、僕の唯一にして随一の女友だちであるみきなを口汚く罵った。勘違いするな。相手が人間ではないからといって、化け物だからといって、みきなをバカにする権利はない！！ふざけるな……。ふざけるなよ……ツ！　弼は再び怒りを増幅させた。

「ほお、驚いた……これほどとは……。素晴らしい……はははははツ！！　素晴らしいぞツ！」

赤い目を残虐に歪ませる織。その顔は、もはやキツめの美少女という形容は成りたたず、誰がどう見ても狂氣の魔を思わせる形相だった。そして、人間離れした威圧感のせいか、小さい身体が弼を

上から威圧するかのように巨大に見えた。やはりこいつは……こいつは人間ではない。下手をすると僕を食い殺すために来た、本物の悪魔なのかもしれない。

しかし……！

だからなんだ！

僕は臆さない。

人間であろうと――

怪物だろうと――！――

みきなをイジメるやつは……絶対に許さないッ――！――

彌の怒りが頂点に達した。

そのとき。

ピリリリリ、ピリリリリ。

携帯電話が鳴った。人工音の横槍に、急に現実に引き戻される。そして。

「言ひすぎた。すまぬ。すべて予が悪かつた」

織はペコリと頭をさげてあつさりと謝った。先ほどの妖怪じみた威圧感はすでになく、いつもの、というよりどちらかといえば、心静かで少し冷淡なときの織がいた。

「えつ……」

彌は、肩透かしを食らつたように怒りの感情をそがれた。狐に化かされたような虚脱感がある。女心と秋の空とはよく言つが、この変わり身の早さはそんな悠長なものではない。

理性ではそう考えたものの、本能で振り上げた怒りの拳は、さすがにやり場に困ってしまった。

「なんなんだよ、まつたく！」

こう吐き捨てることでなんとか消化することにしたが、釈然とし

ない思いはひとつでも残る。

「電話に出りやれ。好きなように睦み合ひよからう」

織は、弼に背中を向けると、テレビに向かってぺたりと座り、ヘッドフォンを手に取る。

携帯電話のウイングウには、真幌庭みきなの名前。ピリコリリ、ピリリリリ、という電子音が耳障りに鳴り続けている。

なんだつたんだ、一体。

ただ、冷静になつて、ひとつだけわかつたことがある。
織は僕をわざと怒らせたんだ。あの豹変ぶりはどう考へても不自然だし、いつもの織の言動からみても常軌を逸している。急に謝つて、何事も無かつたかのように振る舞うその態度がいい証拠だ。
でも、なんのために？

そして、その最中に見せたあの悪魔のような顔はどういうことだ。
人間ではないことは、これでほぼはつきりとしたが、それなりにいつの目的は？ そもそも根本的な話だが、なぜ僕の部屋に居座つているんだ？ そして、なぜ、“僕”なんだ……？

それらの疑問が、着信音に押し流されるように、ぐるぐると部屋を対流する。

ただ、なぜか思った。

これだけは言っておかなければならない。

そんな気がして、弼は織の背中に話しかけた。

「みきなに電話したのは」

びくん、と織の肩が震えた。

「ポニー・テールが解けないように結ぶコツを教えてもらつためだよ
そういうと弼は、織に背中を向けて携帯電話を取り上げ、通話ボタンを押した。

「みきな？ ごめん、トイレに行つてた。それでさ……」

織は、被りかけていたヘッドフォンを静かに膝の上に置いた。と同時に床に一杯の飲み物が置かれているのに気づく。一度、弼の背中を見てからそれを手に取つて口にした織は、

「美味……じや」

と驚いた顔でつぶやき、もつ一口飲み込んだ。

「こんなところまで……似おつて……」

織は、手に持ったコップを見つめながら小さく小さくつぶやくと、片目だけで振りかえり、粥の背中をじっと見る。その姿は、織の記憶の海にたゆたう爽やかな少年の背中に重なっていく。

織、水じや。飲め。そなたは少し短気に過ぎる。

「ふといわ。けほつ……んつ！ んつんつ！」

見よ、怒鳴り散らすから喉を痛めたであろう。飲め。清水は冷たくて気持ちよいぞ。

……美味じや。

はつはつはつ！ そなたは常にその顔でおれ！ 怒り顔はあまり見とうない。

……むむつ。

自分の都合だけで、自由に生きられる者は存在しない。

人は誰もが、避け得ぬしがらみと格闘し、またはそれを無視し、ときには融和しながら生きている。

稀に、しがらみのおかげで得る安らぎもある。それは麻薬的な甘美を伴うことが多い。

ただしそれは、哀しいまでに短命だ。

麻薬が切れたあの痛さを、織は、心の臓に針をゆっくり刺されるのに似ていると思った。

「……だからもう、やめよ……優しくするでない……
粥の背中を見つめるその瞳は、哀しみで揺れていた。

第一話（3） 心の穴（前書き）

彌は和服の美少女・織を伴つてショッピングに。そこで会つたのは、幼馴染のみきなだつた。一見平静に振る舞いながらも、淡い恋心を胸に宿していたのは……。【

第一話（3） 心の穴

第一話（3） 心の穴

炎天の下、住宅街の小道はかげろうに揺れ、熱せられた空気は蝉の声で震えた。

そんな中、ゆだめ弼はだらだらと歩き、織は嬉しげに跳ねている。

跳ねている、というのは比喩ではない。織はまるで上機嫌な子犬のように、スキップで右へ左へ飛びまわっているのだ。

そんなに動き回つたら汗をかくのに……。加えて、その幾重かに重ね着た和服は猛暑には地獄のはず。

歴史の知識が浅い弼には、どの時代のどういう種類の和服なのかわからない。聖徳太子の時代の女性天皇が、こんな格好をしていたような気がする。昔ばなしの絵本にも、どこかでこんな格好をした姫が登場した記憶がある。が……。さて、どこだったか。何の話だつたか。

一方の弼は、Tシャツに短パン、サンダルという軽装。それでも日差しの強さとアスファルトの照り返しに辟易する。

この一人が並んで歩くと、とても悪い意味で目立つた。弼にはそれが恥ずかしい。

弼は不機嫌そうに聞いた。

「なんで付いてきたんだよ」

「よいではないか。予とて長らくヌシの部屋に軟禁されておったのじゃ。たまには外の空気も吸いたい」

人聞きの悪いことを言つた。お前が勝手に居座つているだけじゃないか。弼はそう思いながら隣を歩く織を見下ろす。そう、並んで歩いたことが無かつたので今まで気付かなかつたが、一七三センチの弼にとって、おそらく一五〇センチも無い織は、“見下ろす”という表現がぴたりくるほど小さく感じる。今どきの女の子なら、

かかとのある靴を履くことでバランスをとるだらうが、彼女はなんと、足袋に草履だ。小ささが余計に際立つ。

「それに、ヌシは色の趣味が悪い。予が身に付けるものは、予が選ぶ

「はいはい、悪かつたね」

ポニー・テールが解けないよつに結ぶコツを真幌庭みきながらリサーチした結果、弼は“ヘアゴム”という物の存在を知った。彼女は、そんなことも知らないのか、とは言わなかつたが、声音は明らかにそう言つていた。

「結んだところをかわいく飾るシユシユとかもあるんだよ」「しゅしゅ？」

「綺麗な布で飾つたゴムなんだけど、これだけだとポニー・テールはほどけちゃうかな。だから、ヘアゴムでもついて縛つて、その上にシユシユを付けてる子が多いよ」

「へえ……」

「髪、長いの？ ゆだめの彼女

「……かつ……彼女！？」

「彼女できたらんでしょ？ そんなこと聞いてくるくらいだし」

「しまつた。普通に考えれば、そうとられてもおかしくない。

「そ、そんなんじゃないよ。ほらー、あれだ。なんだ。……そう、小説！ 今、自分で小説を書いてこた。そこにポニー・テールの女の子を出したくて」

「…………うわ」

「…………う、うそじやねーよ」

「ゆだめ、うそつこてるときのクセがあるんだよ。だから私、ゆだめのうそはわかるんだ。小ちこときから全然変わってないんだもん

「…………うそでした」

みきなが、電話の向こうでクスッと笑つた。

「素直でよろしき。シユシユとかヘアゴムとか、男の子が買いに行

くのはちょっと勇気いるよ。女の子用の雑貨屋さんだし

「そ、そつなのか！？」

「その……付いてつてあげても、いいんだけど？」

弼は躊躇した。いつもなら氣にならないみきなの言い方に、なぜか今日は反応したのだ。

あの優しさは、己が生きやすい境遇を作りあげるための、單なる擬態じや。

ヌシのほのかな好意もアヤシはとうに見抜いておるぞ。
ちつ、織のやつ。余計なことを言いやがつて。違うとわかつても気にしちゃうだろ。しかも「言いすぎた」と急に謝るもんだから、逆に記憶に残つて仕方が無い。

弼は、今までになかった意地のようなものが芽生えていることに気がついた。みきなの助け舟に乗るのは簡単だ。しかし、そのことを織が知れば、馬鹿にしたような薄笑いで何を言うかわからない。それは耐えがたい屈辱である以上、弼はみきなの提案を素直に受け入れることができなくなつていた。

「いや、いいよ。一人で行く」

「……えつ？」

「外、暑いしや。悪いし。ありがとな。助かったよ

「……うん」

そうして一人家を出た弼だが、後から走つて追いかけてきた奇妙な和服の織を見たときは、暑さのせいではない汗が大量に噴き出た。悪目立ちするのは苦手だ。あまりそういう恥ずかしさに慣れていかない弼である。

それにも、と歩きながら考える。

あの織の急激な変化は何だったのだろうか。彼女が意味もなく“人ではない”姿を弼の前に晒すわけがない。もし弼が強烈な拒絶反応を起こし、力ずくで彼女を追い出そうとしたらどうするつもりだったのか。それこそ本当に、頭から弼を食い殺すつもりだったのだ

ろうか。

までよ、そもそも僕はなぜ織を家に置いておくんだ。そんなに迷惑なら、それこそ力ずくで追い出せばいいじゃないか。理屈では弼もわかつている。何度となく出て行つて欲しいと思った。しかしそう思うたびに、あることを思い出し、それが気になつてしまふのだ。

「ヌシの願いを聞き届けてやつた」

初めて会つたとき、織が不機嫌そうに言つた言葉。これはいつたい、どういう意味なのだろう。叶えてやる、でも、叶えてやつた、でも、聞き届けてやる、でもない。“聞き届けてやつた”と織は言った。今まで何度も何度か疑問には思つたが、その都度に結論を出すことを諦めていた。

新たな判断材料が加わったわけでもないので、結局この問題は解決しないのだが、それでも弼は、織が人間ではないことに何か関係がある、ということまで考えた。そして、いつものようにじたまよぐ思考を停止した。

なんにせよ、今の織は機嫌がいい。こんなにも上機嫌な織を見たのは、ゲームで遊んでいるときを除けば初めてだ。そして小さい。悪魔の形相のときの織は恐ろしい巨人に見えた。たぶん自分の膝と魂が縮こまつたせいで、二〇センチ以上ある身長差が逆転したのだと思う。

はあ……。このままなら、かわいいのに。

そう思つて苦笑した。“咬まなければかわいいのに”と言つてゐる犬の飼い主と、心情が重なつた気がしたからだ。

人間なんて身勝手なモンだな。

自分が織を犬と同列に考えていることに気付いて、弼は笑いの衝動がこみあげてきた。だが、その笑いを必死でかみ殺す。なぜなら、横で跳ねている人型のワンコロは、そういう弼の心情に大変タイヘン敏感な生物だからだ。

「よからぬことを考えておらぬか」

ほらきた。じとつとした目で睨む織が行く手を阻む。

「被害妄想。自意識過剰。暑苦しいから僕の視界の外で跳ねてくれ」
彼女の横を何事もなかつたかのように通り過ぎる弼。必要以上にツンケンしたのは、笑いを喉の下で食い止めていたから。そうとは知らぬ織は、不満顔で一步後ろをついてくる。しばらくは大人しく歩いていたのだが、じきに遠慮がちにぺたんぺたんと草履が跳ねる音が聞こえてきた。弼は必死で笑いをこらえながら歩みを進める。

あれ、心が、軽くなつていないか。

ふと気づいた。父親の葬式からこのかた、これほど心が浮き立つことは無い。日がな一日ベッドに寝ころび、泣けないことに悩み、階下の母親を敬遠し、世間との接触を拒絶し続けた日々が遠い過去のように思える。やはり、織が僕の部屋に居座りだしてから、負の連鎖が止まつたんだ。寝不足に悩み、罵声を怖がり、織との関係を疑問視し続けていたら、いつのまにか。

そうか。手順はどうであれ、今僕が笑えるのはこいつのおかげなんだ。初めて感謝の念に近い思いを抱く。その途端、織に対する見方がドミノのようにパタパタと音を立てて変わっていくを感じた。人間ではないかもしれない。でも、もしかしたら、僕にとって大切なヤツなのかもしれない。

弼は振り返らずに声をかけた。

「織」

「……なんじゃ」

「お前、車つて知つてるか」

「知つてあるわ！ 牛が牽く貴族の乗り物であるひつ」

「残念、違う。僕の知つている限りでは違う」

「で、ヌシの知つてある車がどうした」

「お前の知つてている車より数倍速く走る機械でさ、道路側に立つているときにぶつかると危険なんだ。日を離すと轢かれそうで怖いから、横にいてくれ」

背後で跳ねる音が止んだ。どうやら立ち止まつたようだ。弼も立ち止まつて振り返る。

織は、俯いて顔を真っ赤にしていた。弼の耳に小さく「やめよ」とつぶやいた声が聞こえた。

「え、何が。どうした織」

「どうもせぬわっ！ バカモノッ！！」

急に怒鳴ったかと思うと、すたすたと弼を追い抜いて早足で歩いていく。弼は、何だよ、と訝しがり、実際に小さく口に出した。

その時、弼の耳が車の駆動音を捉えた。これは……勢いよく走つてくる車の音。

首筋に冷や汗が浮き出る。織が早足で小さな交差点に差し掛かっているのだ。弼は、恐怖で心臓を轟づかみにされたように立ちすくんだ。

いや！ 大切なヤツかもしないんだ！ 怯えるな！ 一步、前へ！ 間に合えッ！

「危ないッ！！！」

パアアアアアアアアアアアアアアアアッ！！

弼は織の腕を強く引き、車は乱暴なクラクションを残して走り去つた。

……足が、震えている。手も、だ。
危なかつた……。

心に怒りが湧いた。こんな細い路で飛ばしやがって！ もう少しで織が……。そうだ、織は……。

弼が守つた織は彼の腕の中にいた。儚げで小さな体は身じろぎひとつせずに力チンコチンに固まつている。弼はそれを、恐怖のせいだと解釈した。

ふうつ、と気持ちを落ち着かせる息を吐き、手足の震えが少し収まつたのを確認すると、織の頭を胸に抱え込んでいた腕の力を緩め

る。

「大丈夫か」

織はカチンコチンのまま、こくりとうなずいた。その小さな肩を両手で掴んで自分の足で立たせる。

「初めて見たな。あれが、車だ」

織は、また黙つてこくりとうなずいた。

それからの道中、織は弼のシャツの背中を掴んだまま、俯きっぱなしで歩いた。大変歩きづらかったが、弼は文句を言わなかつた。理由はともかく、そうするべきだと思ったのだった。

自宅と高校の中間地点に、大型のショッピングコンプレックスがある。弼たち学生はここを遊びの拠点とすることが多い。もちろん主婦の御用達もあるため、平日の午後は付近の道路が渋滞するほど人であふれかえる。カラオケやボーリング、映画館などの娯楽施設はもちろん、食料品、生活用品、衣類店、雑貨屋、日曜大工店、おもちゃ屋、眼鏡屋、本屋、CDショップなどが軒をそろえ、日常生活に必要なものはここに来れば一通り手に入る。また、病院や美容院、楽器屋、家電量販店、レストランにフードコートなども開業しており、ひとつ小さなショッピング街がまるまる入ったような作りになつているのだ。

何か必要になつたらここに来ればよい、と弼は思つてゐる。たかだかヘアゴムひとつを買うだけのために、と普通なら少しは考えそうなものだが、そこは女子との接点が極めて少ない男子の哀しい性。女の子が普段使いするグッズを揃えるお店の存在など、知る由もない。知らない、といふのはそれだけで余計なエネルギーを消費するものなのだ。

織は、あまりに巨大で華やかな場所に、圧倒されていた。特に建築の構造に心底驚いていた。このショッピングコンプレックスは中央が大きな吹き抜けとなつていて、その端に上り下りのエスカレーターが複数台行き来している。正面口から入店すると、そ

の巨大な吹き抜けが六フロアにわたってぶち抜かれている光景を一望できる。最初に訪れたときは弱ですらそのスケールに圧倒されたものだ。人間、何かに圧倒されると呆けたようになるが、織もその方程式から外れることなく、めいっぱい呆けている。感情とそれに付随する表現方法は、人間のそれと何ら変わることはないのだな、と織を化け物と断定して再確認する弱だった。

案内板を見てエスカレーターを6フロアまで昇り、目的の店を前にして、弱は戦慄した。

もしかして、この店に入らなければならないのだろうか……。

中学生から大人まで幅広い年齢層の女性たちが、代わる代わる小さなアクセサリーを手にとつては戻すという行為を、小鳥のついばみのように繰り返している。スチル製のスタンドに所せましと飾られるピアス類。女性らしい曲線をモチーフにした色鮮やかなリングたち。アクセサリ、髪留め、ブラシ、文具、財布、バッグ、傘、CD、キャラクターグッズ……。ピンクやオレンジを基調にした色鮮やかなアイテムが目白押しだ。どれもが弱の人生と交わる予定の無いものばかりである。

みきなの言つた意味がようやく理解できた。これは確かに入りづらい。付いてもらえばよかつたと猛烈に後悔する。たかだかヘアゴムを買うだけなのに。

そうだ、お金を渡して織に買いに行かせればよいのではないか。

「織。あれ？ おーい……」

助けを求めるよと背後に声をかけたが、そこにいるものだと思つていた織の影がない。周囲を見渡すと……いた。吹き抜けから階下を2フロア見下ろしたその先で、織はおもちゃ屋にハマっていた。案の定、ゲームの試遊台で遊び出している。それにしても……。

「こんなに遠くからでも、ずいぶん目立つなあ、あいつ」

時代がかつた和服姿にポニーテール。しかもミクロな美少女が、モンスターをなぎ倒すゲームに夢中になつてゐるのだ。そのうちオ

タクの聖地でコスプレイヤーとしてスカウトされるのではないか。今まで彼女を外に連れ出したことがないが、初めてオタク文化と織の親和性に気づいた弼だった。

「 ゆだめ？」

耳慣れた声に振り向くと、そこには、みきなが立っていた。

白地に黒の水玉模様が涼しげな薄手のブラウス。胸元には同じ柄のリボンが。脚を大きく出したベージュのキュロットスカートは、端をレースで飾っている。足元は足首までクロスした少し大人っぽいレザーネックレスのサンダル。清楚ないまどきのお嬢様を象徴するファッショングで全身を隙なく固めている。

弼の目線から表現すれば、白い上着にスカート姿、だ。しかし、みきならしいという感想を抱くくらいはそのファッショングを評価している。そして、相変わらずモテそうだな、と思う。

それ以上に弼は、心の底から安堵した。

「 なんでお前……でも、た、助かつた……」

「 もしかして、『』のお店に入らうと思つていたの？」

「 ……うん」

「 勇気あるね、ゆだめ」

「 その勇気を振り絞る手段について、自立内会議を開催していたところ」

丸めた手を口にあてて、小さく笑うみきな。

「 討議の行方はいかがですか」

「 ……紛糾しております」

みきなは耐えきれずに声に出して笑つた。そして、笑顔で弼の顔を見ると、前向きなレスキューの姿勢を見せてくれた。

「 もー、買ってきてあげるよ。どんなシユシユがお望みな、彼女さんは」

「 いや、彼女じゃなくて……あと、ヘアゴムで良くて……」

「 ……えつ？ ヘアゴムを買いにわざわざ『』まで来たのー？」

「 う、ん。おかしかったか？」

「呆れた。ヘアゴムなんてコンビニでも売つてゐるよ」

「そ、そつなかつ！？」

「コンビニなら、自宅から徒歩三分のところにあつたの……。

「ついでだからシコシコも買つていけばいいじゃない。どんなのが似合う人なの？」

「えつ……いや、いいよ。それならコンビニで買つから」

「だーめ。喜ぶと思うよ、彼女さん。かわいいの選んできてあげるから！ ポニー テールにすることが多い人なんでしょう？ どんな色の服を着るの？」

矢継ぎ早なみきなの勢いに、たじたじになる弼。彼女への贈り物と断定されてしまつたことに抗議する暇もなく、色について質問された弼は、必死で織の格好を思い出す。フロアの下を覗き込めば階下にいるのだが、関係の解説も、弼の心情も、絶妙に複雑骨折しているので、みきなに勘付かれたくない。

織の着ている服がどんな色なのかを、弼の表現力で伝うといふのは酷な話だ。何しろ、緋色や菖蒲色など、和の色が重なり合つてゐる。よつて、こうじう言葉になつてしまつ。

「……えつと……赤とか紫とか……」

「へえ、ビビットな色が好きなんだね」

みきなは、それぞれ色別にコーディネートを頭に思い浮かべていた。派手な人なのかな、とまで想像している。

「服装は？」

「ふ、服装！？ え、と……わ、和服？」

その言葉に、みきなが一瞬身構えた。

「……年上？ ちよつとゆだめ。まさか、人妻じゃないよね」

「ち、ちがッ！ ばかっ、変なこと言つくなよ！」

「わかつたわかつた。じゃあ、色味の少ない大人っぽいのを選んであげる」

弼の返答を聞かずみきなは店に入つていく。勘違ひされたままではどうにも居心地の悪いものではあるが、なんとか目的は

達することができたうなので、弼はホッと胸をなでおろした。

柱に体を預けて、みきなの買い物を眺めて待つ。彼女は、いろいろと手にとつては見比べ、戻し、を繰り返している。しばりくして、弼に田線をよこし、肩くらいの高さにひとつひとつのシコシコを掲げて見せる。薄い紫と緑のちりめん地で、確かに織の格好に似合っている。首を軽く縦に振りながら、

「女の子って、すげえ」

と妙に感心した。続けてひ字ピングやらかんざしやらへアクリップやらを掲げ出したので、慌てて全部に手をクロスして要らない旨を伝えた。ちょっと不満そうなみきなだったが、ひとつずくと、レジに並んだ。

「はー、どうぞ。プレゼント包装はしてもらわなかつたけど、いいよね

「い、いいに決まつてるだろ！」

みきなが差し出した紙袋を受け取ると、千円札を無造作に差し出した。

「えつ、大した金額じゃないからいいよ

「何言つてんだ。ダメに決まつてるだろ

「……あ」

みきなは両手を口の前で合わせた。

「そつか。ゴメン！ 気が利かなくて…」

弼はみきなの反応に首をかしげ、数秒してその真意に気づき赤面した。彼女へのプレゼントを別の女の子に買ってもらう、という男として最低な行為の図式が、よつやく弼の頭の中に形を成したのだ。

「ばつ、ばか、違う！ そつこつんじやなくて…」「じゃあれ……」

慌てて言い繕おうとする弼から、みきなは意味ありげに田線を外した。

「そのお釣で、お茶でもおじりてよ……」

みきなは小さな提案をした。しかしその控えめさとは裏腹に、彼女がこの言葉を紡ぐには莫大な勇気と鼓動の加速が必要だった。特定の相手という障害を認識したうえで、一人きりの会話の時間を得ようとしたのである。あらゆる面で弼に誤解されてもおかしくはない。

だが幸か不幸か、その真意を理解するほど弼の感性は敏感にできていなかつた。表情ひとつ変えず、ああ、それくらい何てことないよ、と答えようとしたその時。

「弼えええええエエエエエエエエッ！」

つんざくような織の声が、大きな吹き抜けの2フロア分をものとせず、弼の鼓膜を打つた。

弾かれたように吹き抜けに駆け寄り、手すりに体を預けておもちゃ屋を見下ろすと、織の周囲に大勢の人だかりができてあり、何か言い寄られている様子が目に入った。弼と目線が合つた織の表情は、明らかに助けを求めている。客に余計な説教をしてトラブルでも引き起こしたのか。化け物だとバレて警察沙汰にでもなつたか。お金の概念を知らずに万引きと勘違いされたか。試遊台を破壊して店員に詰め寄られているのか。とにかく織が加害者である想像しかできなかつた弼は、全身から冷や汗が出た。

「すまない！　みきな、また今度！！」

弼は千円札をみきなの右手に握らせると、全速力で下りのエスカレータに駆けていった。その後ろ姿に呼び止める声をかけようとしたみきなだが、弼の姿はすでにそこには無かつた。しばらく呆然とした後、みきなは俯いて受け取った千円札を広げる。そして、そりやそうだよねえ……あーあ……と心の中でため息をついた。

そのとき、下りのエスカレータが突如騒然とした。「キヤツ」「

あ、危ねえな！」という悲鳴や怒号をかき分けて、「『めんなさい

ツ！』と弼の声が聞こえる。弔かれたようにみきなは顔を上げた。

弼は息を切らしながらエスカレーターを逆走しきると、彼女に向かって、

「みきな、ありがとな！」

と紙袋を小心翼へ掲げた。

「……どうございましたして」

みきなが少し笑つたのを確認すると、弼はまたエスカレーターを駆け下りて行つた。

疼く心は恋心とは限らない。なぜなら、失恋しても心は疼くからだ。
誰が言つたか忘れたが、みきなはそんな言葉を思い出していた。

私のこの心の疼きは、どうなんだろう。

みきな自身にも、それはわからなかつた。

第一話(4) 心の六 了(前書き)

彌と織はショッピングコンプレックスの帰り道、最悪の危機に陥る。
彌は織を守りきれるのか。そしてその後のふたりは……。第一話終了。

第一話（4）心の穴 了

「なんなんだよ、あの店長！」

ショッピングコンプレックスからの帰り道。弼は憤っていた。

「怒るでない。店長は予の美しさゆえに声をかけて参つたのである

から

「だつたら助けを求めるなつ！」

織の叫び声を聞いた弼は、みきなに礼を言つておもぢや屋の前に全力疾走で駆けつけた。織は大勢の男性客たちに取り囲まれており、弼は人の壁をかき分けてようやく彼女の前にたどり着くと、信じられないものを見た。

肩から“アキバ人気NO.1コスプレイヤー”といつ手書きのたすきを掛けられた織が、列をなす男性たちに次々と握手を求められていたのだ。

「さあさあ寄つてらっしゃい見てらっしゃい！ 我らが聖地から当店に足をお運びくださった超人気コスプレイヤーさんだ！ 当店のチラシを受け取ってくれたら今なら彼女の握手付き！ 握手しどくと今夜は一次元の夢が見られるつてえ噂だよ！」

店長らしき女性がバナナのたたき売りよろしく頭にタオルを巻いて威勢よく声を張り上げている。一次元の夢つていつたいなに！？ と弼は心のなかでツッコんだが、とにかく弼はまだ若そうな店長の肩を掴んだ。

「おい、これははどういうことだ」

「お客様、握手は並んで！ 列を乱しちゃダメですよ！」

「そうじゃない！ こいつは僕の連れなんだ。なんでこんなことになつている！」

弼がそう言つと、店長の女性はすりおちたメガネを人差し指で押し上げながら、商売つ氣たつぶりの笑顔で得意げに言い放つた。

「ああ、彼女、やっぱりプロだったんですか。マネージャさんで

すね。ギャラの交渉は「日本人にしましたから、文句を言われる筋合
いは」「ざこませんよ～」

「はあつ！？」

織を振り返ると、彼女は額に汗を浮かばせながら、チラシを渡しては握手、チラシを渡しては握手、を繰り返している。何とか苦心の上の笑顔を取り繕つているようだが、どうみても楽しそうではない。

「ギャラの交渉とか意味がわからん！　とにかく連れて帰る」

「ちよつちよつ、ちよーつと待つた！　わかった、時給890円！
110円、900円にするから！」

10円単位のせこい交渉と、あまりに安いギャラに、元値はいくらだ！　と心で叫ぶ。だいたいタレントは時給で働かないだろう、といったんは呆れたが、いやいやいや、この店長は根本的にあらゆることを間違っている！　と冷静になつて思いなおす。弼は織の手を掴むと、たすきとチラシを店長に押しやり、強引に連れだした。

背後からは

「ああ～、ボクの巫女さんがあ～」

という男性客たちの声が聞こえてきたが、知るか！　ていうかこの格好、巫女じやねーだろ！　と毒づきながらショッピングコンプレックスを早足に出たのだった。

「しかしヌシの世界は面白いの。こんなにも人から握手を求められたのは初めての経験ぞ」

少しホクホクした顔の織。

「コスプレオタクにモテても嬉しいんだな」

「おや……ヌシ、まさか、妬いておるのか

「誰が！」

「ならば良いではないか。アヤツらの嗜好・趣向に贅回するものではないが、予は理解はするぞ。手を握ることにどれほどの価値があるのかはわからぬが、アヤツらも楽しそうしておった」

まったく、こいつの感覚には付いていけない。憤りを通り越して、呆れる領域にまで達観した弼であった。二人は、各々の感情を道連れに、行きに通つた路を再び踏みなおす。

「ところでヌシ、予の小物は揃うたのか」「ん

弼は小さな紙袋を織に付きだした。不思議そうな顔で受け取った織は、がさごと袋を開くと、少女のような感激を顔に浮かべた。10本ほどの黒いヘアゴムを小さなシールで束ねたものと、ちりめん地のシュシュを袋から出して手に取る。

「こちらが髪を束ねるための紐か。して、これは……なんじゃ」「嬉しそうに聞く織。たかだか千円の出費でそこまで喜ばれると、弼も悪い気はしない。

「シユシユって言うらしい。束ねたところに巻くんだそうだ」

「……布の髪飾りじゃの。ヌシの趣味も悪くない」

弼はもちろん、みきなに選んでもらったことを言つつもりはない。多少の後ろめたさはあるが、別にみきなと織の間に接点が生まれることもないだろうし、と軽く考えた。しばらく後に弼は自分の甘さを呪うことになるのだが、それはまた別の話だ。

上機嫌の織が横で跳ねているのを、朗らかな気持ちで眺めていた弼だったが、例の空き地のある坂の途中で、急に表情を険しくした。あいつらは……。

この近所にナンバーという略称で有名な高校がある。正式名称を県立鳥居南高校といい、その生徒たちは札付きの悪童ばかりで、大人ですから怯む過激な悪事を次々と働いているともっぱらの噂だ。中でも色黒でタンクトップ姿のピアス、キャップを斜めに被つた猿、身長一ハハを超えるロンゲの三人は悪事の頂点を極め、とにかくそのうちの一人でも見かけたら避けて通れと言われている。

その三人が、道の真ん中に座り込みながら、煙草を吸っていた。手に大量の汗を握る。これはまずい。レベル1の勇者が遊び人だ

けを連れてラスボス三体を同時に相手にするようなものだ。気付かれないように別の道を通つて帰るのが上策だろ。腹をすかせた狼の群れの前で逃げる準備をする兎のよつこ、弼は足音すら消しながら元来た坂道を下る。うとする。

「弼！　帰り道はこちらである。ぞこへいくのじや」

あツ遊び人のばかああつ！　誤つて小枝を踏んでしまつた兎の心境で体が固まつた。後ろを振り向くと……。

「おやおやおやア……」

三人が立ちあがつてこちらを見ながらニヤニヤと笑つている。そして、色黒ピアスが体を左右に揺らしながらゆつくりと歩いてきた。それを見た後ろの二人も煙草の吸殻を投げ捨てる。これは今からでもいいので走つて逃げるべきではないか。しかし織は彼らを気にする様子もなく歩きだしているし、自分の足はすくんで言つことを聞かない。

これは……ヤバい……。

「かわいいねえ、なに、そのカツ！」？

色黒ピアスは短パンのポケットに両手をつつこみ、体を曲げながら、猫撫で声で織に話しかけた。

「芸能人なの？　ねえ、そうなの？」

「芸能人とはなんじや。すまぬが予は家に帰るとこりでな。邪魔立てするでない」

織は普段と変わらぬ声で返事をする。無知ゆえの鈍感さなのか、それとも生来の偉そうな態度がそいつさせるのか、彼女に怯んだ様子は一切ない。すると、後ろで見ていたキヤツプ猿が、特徴のある猿のよつな笑いと共に織の前に立ちふさがつた。

「ぎやつひつひつ、なにコイツ！　キャラに入り込んでるんですけどー！」

「なんじや。どきやれ、邪魔じやぞ」

「罰ゲーム？　コスプレ？　そのかつこでエッチなことするの？」

「おやつひつひつ」

「おつ、マジかよ。いいなあ～、混ぜてほしいなあ～」

一人は前に進もうとする織の行く手をふさぐ。

ようやく織は、彼らが自分に危害を加えようと絡んできており、そして侮辱していることに気づいたらしく。織の皿つきが急に鋭くなる。そして、急に目と口をゆがめた。

「ふふふ、ヌシらも、なかなかかわいいぞ」

「な、何を言い出すつもりだアイツ。

「おつ、話がわかるじゃん。ねえねえ遊ぼうよー」

「ヌシら、スライムみたいな顔をしておる」

「……スライム？」

「おや、耳はあるんじゃの、スライムのくせに」

織は、粥がしおちゅうつ食らっていた、あの心の底から軽蔑したような声を吐いた。

「ニヤニヤとした顔つきで集団で自ら寄りつきおり、勇者にめつた斬りにされる、一番弱っちいアレじや。徒党を組んでおなじを囲もうとするあたり、あのケダモノと並べても遜色ない。お、粥」「ひいいいい！ は、話しかけんなよっ！」

場の空気がカキン、と音を立てて凍った。今まで黙っていたデカラングが粥の前に立ちはだかり、鋭い眼光で見下ろすと、小さな子供を相手にするように膝をかがめてドスの利いた声で言った。

「……おいおい、キミの彼女、ずいぶんと威勢がいいねえ」

極悪三人組は同い年の高校一年と聞いていたが、実際に目の前にすると別次元の人間のような威圧感がある。粥は完全に戦意を喪失していた。

「……す、すみません」

「何を謝つておるか！ 予が侮辱されておるのに、謝る奴があるか！」

織は凛とした態度で怒気を発した。

しかし色黒ピアスは聞こえないふりをして、口調だけ優しく粥を

齎す。

「じゃあ、セ、キ!!。」この娘の間違いは、この娘に払つてもうひとついいよな

「えつ……」

「もちろん、体で」

なつ、なんてことを言いやがるー。心の中は怒りで満ちるが、手足がしびれたように動かない。からりじて口が

「い、いや……」

と拒絕らしき言葉を発する。すると色黒ピアスは突然いきり立ち、弼の胸倉を引きあがらんばかりになじり上げてきた。弼の襟元が締まり、息苦しさにつめき声が漏れる。

「……じゃあテメエが払つか！ アアツ！？」

「ぐつ……うえ……な、に？」

「わちろん、金で」

「ぎやつひつひつ！ 別に体でもいいけどよー。」

キヤップ猿が弼の尻を卑猥になでる。

「いやいやいや、それはさすがにムリっしょー。」

テカロングが気持ち悪そうな顔でつっこみ、三人が同時に下卑た声で笑う。

織を見ると……。

僕をじつと見ている。静かに。まるで試すよつこ。

そんな田で見るなよ。敵いつこないよ。

「逃げるのか」

織は言った。責めているのではない、事実をただ確認するよつな、

冷めた声。

「男の子としての矜持を捨て、ただ、逃げるのか」

「おじおじ、彼女さん、変なこと言つだしたよ。キミこーへ、逃げたほうが多いこと思つよおー」

「ぎやひつ！ 抵抗しても結果は同じだよおん！」

ドン、と突き飛ばされ、尻もちをつく。力では敵わない。人数でも敵わない。武器になりそうなものも助けを呼ぶ道具も、何もない。抵抗する手段を見いだせない弼の心は絶望に支配された。

「はやく行けよ…… オラアッ！」

デカラונגが弼のみぞおちをしたたかに蹴りつける。

「ぐおえつ……」

「弼エツ！」

弼は、息がつまり、身動きも取れず、うずくまつて転がるしかできなかつた。織は弼に駆け寄るつとするが、色黒ピアスが後ろから抱きついて離さない。

なんで……こんな……田に……。

一方の織は怒りを目に宿して奴らを睨みつけている。

「……オイ、小僧。早く行けよ。もう一発欲しいか？」

デカラונגはうずくまる弼の髪をわしづかみにして、無理やり立たせた。フラフラとした足取りで、弼は坂道を登っていく。

「ぎやーっひつひつ！ 早く行けよ！ 歩いてんじやねーよつ！」

キャップ猿が弼の尻を蹴りあげた。前につんのめりそうになりながら、弼は、織とすれ違つ。

織は、最後まで弼を見ていた。

弼は、最後まで織を見なかつた。

そして、走つた。後ろを振り向かずに走つた。背中から三人の笑い声がする。

弼を見ている織の姿が脳裏から離れない。その手には、買つたばかりのヘアゴムとシュシュの入つた紙袋が。

胸に押し寄せるコレは何だ！ 手足を震わせるコレは何だ！ 僕の存在を否定するコレは何だ！

弼は、叫んだ。

「ああくくくくおおおおおおつつつ……」

全力で、走った。

心の中で、中途半端に貯まつた水が、わざわざぱりぱりと揺れた。

最後の最後まで、坂を駆け上がる弱を見廻ける織。そんな彼女の前にぬつと顔を突き出したデカラロングは、

「あれれれえ、彼氏わん、逃げちゃつたよ

と言つて織のあいに煙草臭い手で触れた。織は顔をそむける。「みつともないねえ、キミの彼氏。俺達のせつがずっと優しいぜえ」と。いいところに連れてつてやるからよ。……

後ろから抱きついたまま色黒ピアスが織の耳元で囁いた。いやらしい手つきで織の胸元をまさぐりつとする。

「みつともない、じやとへ」

織が、雷鳴の尾のみづに低い声でつぶやいた。

「……アン?」

色黒ピアスの手が織の胸の掛け合わせの上で止まつた。

「みつともないのはどちらじゅ。徒党を組んで力ずくで女を手籠にしようとする卑怯者どもが

「……んだとお?」

「弼は、最後の最後までここに踏みとどまつただ。どちらが力で脅すまではの」

三人は、今度は小さく、そして低く笑い声をたてた。

「でもさ、キミの彼氏、逃げちゃつたよ? 抵抗も何もしないで、すたこら走つて逃げちゃつたよ?」

「さやつひつひつひつ、その口あんまイジメンなよお~。これから、もつと泣かすんだからな」

織は、全身の力をバネのように解き放つた。

色黒ピアスの腕の中からするりと抜け出ると、三人を見下ろす位置まで坂を駆け上がり、振り向いて仁王立ちした。弼が“プチ仁王”と称した、凄味の利いた笑顔で、腰に手を当てて。

「弼を甘くみるでない。予が選んだ男の子じや。二万五千年ぶりに選んだ男の子なのじや」

三人は、一瞬あっけにとられて押し黙つた。そして、うすら笑いを浮かべながら、織に近寄つてくる。

「おやあ、もしかして電波系拾っちゃつた？ 頭、大丈夫ですかあ？」

「もう、拉致つちまおうぜ。顔も……体も良さそうだしな。ふへへへつ……」

「できるものならやつてみよスライムども。雑魚は、倒されるために存在するのじやぞ」

「このアマ。調子に……」

色黒ピアスが織の細い手首をつかもうとしたそのときだった。坂の上から、相手を殺すために突撃する戦国時代の兵士のような唸り声と共に、シャーッというベアリング音が聞こえてくる。音は織の背後で徐々に大きくなつて来る。織がニヤリと笑つた。不審に思った三人は、彼女を避けて左右にその後ろを覗き込んだ。そこには……。

下り坂を爆走する、自転車に乗つた弼の姿が！

呆然と見ていた三人に向かつて、自転車は恐れも知らずに突撃していく。空き地に放置されていた迷惑な放置自転車は、時速40キロを超える滑車の武器と化し、回避する暇をとえずにてカロングに衝突した！

「ンガッ！」

デカラングのみぞおちに、先ほどの蹴りのお返しとばかり自転車ごと体当たりする弼。自転車がぶつかった衝撃で、弼は体を前に投げ出されるが、その勢いを借りて肘をデカラングの顔面に打ち込む。巨体がスローモーションのようにゆっくりと倒れ、完全にノックアウトした。弼は膝をアスファルトに擦り、血を噴き出しながらも、目を鋭く光らせて立ちあがる。残りのふたりは、驚きのあまりに尻もちをついた。

織は鋭い顔つきで叫ぶ。

「ひとオオオオオオオオツツ！」

その声を聞いて、弼は吼える！

「ぐうおおおおおおつつつ！」

体にかなりの衝撃を受けているはずの弼は、痛みなど微塵も感じさせない力強さで再度坂を駆けあがる。

「ヌシら、いつまで尻もちをついておる。はよう逃げんか。そこにおると……」

一人を見下ろしながら、織は目を炎のように光らせた。一人に怯えの表情が宿る。

「……死ぬぞ……」

不吉な織のつぶやきとともに、その背後からシャーッとこう音が。新たな自転車にまたがった弼が、怒りの塊となつて坂道を駆け下りてきた。

「う、うわっ」

「マジかよ！」

その勢いに完全に呑まれた二人は、気絶している仲間を置いたまま、逃走し始めた。

織の真横を時速40キロの攻撃兵器が通り過ぎ、色黒ピアスの背中に体当たりする。吹っ飛んだ弼の頭が、相手の後頭部にガンツと鈍い音を立ててぶつかった。色黒ピアスは白目を剥いて、崩壊するビルのようにゅっくりと崩れ落ちる。

再び、織が叫び、弼は吼える！

肘を擦り？き、側頭部を地面に叩きつけながら

登ろうとした部の前に、織が立ちふさがった。そして、体ごと抱きかかえると

……もうない。戦意喪失じゃ」

腰を抜かして情けない姿で逃げるキャップ猿を視界

は、くらげのように全身の力が抜けていくのを感じ、その場に座り込んでしまつた。そして、そのまま昏倒した。

遠のく意語の中
續の声が聞こえた気がする

「無茶をしあつて……じゃが……」

どうやつて帰ってきたのか全く覚えていないが、弼は自宅の居間のソファーで意識が戻った。全身がばらばらになつたように痛い。肘、膝、側頭部、体のあらゆる箇所に絆創膏と包帯で治療された跡があるのを見て、弼はようやく何があつたのかを思い出した。

はじひつた……。

愛犬とはぐれたかのような不安と焦りを覚えた強は、無理矢理起き上がろうとして激痛に顔をゆがめた。ソファから転げ落ちるよう膝を付くと、全身の痛みをこらえて立ちあがる。織は……どこにいった……。

いた。

「そうなの。織ちゃんも大変だったのね」

「なんのなんの……弱に助けてもらつたのは子のほうじゃからー。」

織……。ああ、無事だったか……。

弼は台所の一人に勘付かれないと、音を消しながら歩み寄つた。

すりガラスの曳き戸のすき間から台所を覗き見ると、織はダイニングテーブルに座つており、なぜか弼の母がブラシで織の髪を梳かし、ひとつに束ねようとしていた。テーブルの上には、紙袋から出されたヘアゴムとシュシュが出番を待つように並べられている。

「うふふふつ、面白い喋り方をするのね。でも織ちゃんにお話していると、元気になるわ」

「（）母堂は……元気が無いのか」

「最近ね、夫を亡くしてから、何をしても気力が湧かなくて。あの子もあるとおり内氣だから、話相手になるわけでもないし」

「う、む。確かにちと内向的じゃの」

「織ちゃんみたいな娘がいたら、もう少し私も明るく振る舞えたのかしらね。あの子を励まさなきやいけないので……あの子にはかわいそうなことをしたわ……」

と寂しげに微笑んだ。その姿を見続けられず、弼は、うなだれた。「僕のほうこそ……ごめん……母さん……」

弱さをさらけだした母親を、元氣づけるどころかずっと避け続けていた自分を、初めて強く恥じた。

「はい、できた！ あら、かわいい。その服にも似合つたのね、ポーネールルつて」

「おお、ありがたい。なるほど、いつもして櫛で髪を整え、ヘアゴムできつく縛るのじゃな」

「シュシュも付けていらっしゃる。趣味のいい色じゃない」

「ふふふ、驚くなれ。弼が選んだのじゃぞ」

「えつ！？ そんなセンス、あの子にあつたの！？ あら……本当

に似合うわ

すみません、みきなのセンスです。弼は痛む肘を押さえ、蔭ながら謝った。

母親は織の正面の椅子に座ると、鏡を立てて見せた。織は、嬉しそうに頭を左右に振りながらポニー・テール姿を確認する。つん、と指先でシュシュに触れるあたり、どうやら当人も気に入った様子だ。しかし、鏡を持つ母親の顔に明るさが足りないことを見てとつた織は、しばらく考え込むと、真剣な顔つきで切り出した。

「（母堂、提案があるのじゃが

「提案？」

「そうじゃ。大変不躾なことは存じてあるのだが……」

一度言い淀んだ織は、顔を上げて真剣な表情を見せた。

「予にこの家の一部屋を間借りさせてくれぬか」

「…………えつ、つまり…………下宿！？」

ええっ！？ 弼は織のあまりに思いきった提案に、音を立てないよう、器用にのけぞつた。

「そうじゃ！ 予は先ほども申したが親がこの国におらぬ。そしてできれば弼と同じ学校に通いたいと思うてある。必ずどこかに住まなければならぬのじゃが、こんなこともあつたばかりじやからの……正直一人は不安なのじゃ

親？ 学校？ 通う？ 何を言い出すんだあいつは！ だいたい授業について行くだけの学力と金はあるのか。特に、あいつにとつて一番の鬼門は現代常識だ。信号の意味もわからず現代人として生きるには不都合が多くなる。そもそも彼女は人間ですらないではないか。

「親が不在では生活にも支障をきたす。もちろん家賃と食費はお支払いいたすゆえ、ご面倒ではあろうが予の食事も賄つていただける

とありがたい」

極めて明るい声で織が言つ。その顔に、母親の驚いた顔が少しだけ緩む。しかし

「そりや、家計も助かるし、私も織ちゃんがこの家にいてくれたら嬉しいけど……」

と言つて母親は眉をハの字にして口元もつた。

「何か心配」とでもおありか？ それともやはり、「迷惑か」「迷惑だなんて……。ただ、曲がりなりにも男の子のいる家だしねえ……」

自分の息子を指して曲がりなりとはなんだ、と弼は心で反発する。

「弼のことを申しておるのか」

「あの子のことだから織ちゃんに何かする度胸があるとは思えないけど……あなた、かわいいし。やっぱり心配だわ」

「かわいいなどと、本当のことを堂々と言つるものではない」

なんだ、あいつ。照れてやがる。

ずつずつしかも「かわいい」を否定せず、顔を赤らめて恥ずかしがる織に、口が自然とほころんだ。その思いは、母親も一緒だったらしい。田が笑っている。

織は突然、さっぱりとした笑顔になると、母親に向かつていつ言った。

「予は平氣じや。弼は良じ男の子じやしの」

弼の時が止まつた。

「己の弱さを知つておる。そして弱さを恥じてもおる。何もしないのではない。何をすれば克服できるのか、わからぬだけじゃ」

「織……ちやん」

「『』母堂。弼は、良じ男の子じやぞ」

弼は、口を開けたまま、閉じることができなかつた。

あの織が僕を「良い男の子」と言つた。織を置いてひとりで逃げよつとした僕を……。

「……数年来の親友でも、そこまで言つてくれぬ子はないんじやないかな」

母親の声が震えた。自然、その言葉に弼もつなづく。

ぴちゃん。弼の心中で水滴の音が同心円に響いた気がした。

「織ちゃん、占い師になれるわよ！」「…」

母親が、涙目まま笑いながらそういうこと、織は「占い師とはなんじや」と心外そうに反論している。そんな声が遠くなるほど弼は、織が自分を認めた、という事実が信じられず、いつまでも止むことのない衝撃を受け続けていた。

面と向かつて褒められた言葉を信用してはならない。陰で言わることをこそ真理と思え。

そんな言葉を弼は思い出していた。

織、お前の陰の言葉、嬉しかったよ。
弼は、陰で、つぶやいた。

心の穴が、ふさがっていく。

第一話（一） 部と、織と、学校と（前書き）

彌の家に下宿することになった、人ではない美少女的ナース力である
織。共同生活の手始めは、学校の制服の問題であった。

第一話（一） 弼と、織と、学校と

第一話（一） 弼と、織と、学校と

「こよこよじやの……」

「うん……」

顔を突き合わせてうなずき合つゆだめしき弼と織。

「ここは……予は、これを使うべしと思ひのじやが」

「斬新だけど、いいんじやないかな」

「不安にさせるでない！」軍師役のヌシがそんな弱氣でどつする…

「弱氣つていうか……。いや、絶対勝てるし」

弼の部屋で、ほぼ、いつもの光景が繰り広げられていた。狭い部屋に不釣り合いな32インチのテレビの前で、織がコントローラを握り締めながらペタリと腰を付けて座っている。いつもと少しだけ違うとすれば、弼がその隣に座つて一緒にゲーム画面を睨みつけていることだ。

3Dで構成される世界の中で主人公をまつすぐ歩かせることすら苦心していた織は、ようやく最初の中ボス戦にさしかかり、緊張のあまり弼を軍師に据えた。しかし軍師が見る限り、一〇〇人の盗賊皆を一〇万の大軍で攻めるに等しい闘いのため、いまいち緊迫感に欠ける。織の育てたキャラクターは、スライムだけを倒し続けてすでにレベル20を超えているのだ。

「たぶん、ここはレベル5くらいでクリアするべきボスだぞ」

「つるさいー 予は負けが嫌いなのじや。で、この呪文で良いか？」

「……いいんじゃない。多分効かないと思うけど」

織が選んだのは、どんなに相手の体力値が高からうと、一撃でモンスターを即死に導く死の呪文だ。ゲームで遊ぶことに慣れているユーザーなら、ボス戦での手の呪文は決して効かないことを知つ

ており、まず選択肢から外す。それ以前に、ゲーム序盤のバスを相手に、この呪文を使えるほどレベルアップさせるコーナーがいることなど、開発者ですら予測していないのではないかと弼は思うのだ。

「では、ゆくぞ」「うん……」

しきはザリコを唱えた！

山賊のバスは静かに息をひきとつた！

「やつたぞ弼！」

「ええええっ！？ 効くのつ！？」

一〇〇人からなる山賊のバスは、織の一撃必殺の呪文で、口口と倒されてしまった。

「なんでも、やってみるもんだなあ……」

「弼、ヌシは使えぬの……。軍師は解雇じや」

織は心からがっかりした口調でそう言い捨てる。テレビにピンジャックを刺し込み、自ら密閉型のヘッドフォンを頭に渡した。完全にまた一人遊びモードだ。

別にいいけど……なんかムカつく。

弼は不満そうな顔をして、ベッドに横たわった。

後ろ姿はいつもと変わらぬ妙な和服のポーテール姿。少しだけ違うのは、弼がプレゼントしたシュシュを結び目に付けていることだ。どうやら織はシュシュのデザインと色が気に入つたらしく、時折外してはニヤニヤと眺め、再び付けなおすということを繰り返している。プレゼントした側からすれば少しばらの審美眼を誇りたくなるが、残念なことにそのシュシュは彼の幼馴染であるみきなに選んでもらつたものだ。そして弼はそのことを織に伝えていない。特に不都合を感じないし、黙っていても問題が起こることは無いと

高をくぐつてこる。

「織ちゃん、届いたわよーー。」

階下から弼の母親、律子の声がする。弼は、織のヘッドフォンの片耳を引っ張り、荷物が届いた旨を伝えた。織は目を輝かせてヘッドフォンを外し、

「こぎ、参らうぞおー！」

階段を一段飛ばしで駆け下りていく。弼は、一緒に部屋を出ようとして膝に軽い痛みを覚え、苦痛に顔をしかめた。ナンバー、鳥居南高校の極悪三人組に自転車で体当たりしてから一週間が経つが、まだ完治には至っていない。膝の肉はえぐれているわ、肘の骨にはヒビが入っているわで、結構な重傷だったのだ。

そうか、もう一週間経つのか。弼は時の経つ早さに思いを寄せた。

大怪我をして帰った日、部屋で横になつた弼の包帯を取換えながら、母親の律子は言った。

「織ちゃんが、家に下宿したいそんなんだけど。あなた、どう思つ？」

「どう思つて……」

戸惑つたふりをしたが、弼はその話を隠れて聞いていたため、そこまで驚きはしなかつた。

「母さんはどう思うんだよ」

「思春期の男の子を抱える母親としては、そりや不安よ。織ちゃんだってトイレも行けばお風呂も入るだろ？。洗濯ものだって出るわけでしょ」

おや、と弼は違和感を感じ、その理由に思い当たつた。織がトイレと風呂に行つた姿を見たことがない。彼女は排泄や入浴をどうしているのだろうか。

「そもそも、織ちゃんが襲われているといひたまたま通りかかっ

たあなたが助けて、そのまま下宿つて……。なんかしつくりしないのよね。出来すぎつていうか。織りちゃんは本当に良い子だとは思うけど」「

なんだ、そんな話になつていたのか。織め、僕が氣絶しているのを良いことに、かなり適当な作り話をでつしあげたな。弼は心の中で舌打ちした。

「織と話している母ちゃん、元氣そつだよ」

「……そうね。あの子、先天的な明るさを持つてているみたいで、話していくと氣分が軽くなるのは確かよ」

「なら僕は賛成だ」

「えつ」

「織の下宿、賛成するよ」

突然、断定的な口調になつた弼に、律子は驚いた。

「「めんな、母さん。僕、ちゃんと母さんと話ができるなかつたよな」

驚く律子から目を逸らし、天井を見つめる弼。

「正直、父さんが死んだってこと、まだ実感がわかないんだ。だから今でもその現実から逃げ回つていて、自分の気持ちをちゃんと整理できていない」

律子は手を止め、おし黙つて聞いている。

「だから母さんがどんなに悲しい思いをしているのか、想像もつかないし、元気づける方法もわからない」

そこまで言つて、弼は母親を見た。案の定、律子は目につすらと涙をためている。でも、今まで逃げ回つていた分、今日は絶対に逃げないと決めていた。

「もし織がいることで、母さんが少しでも元気づくなら、いてもらえばいいんじゃないかな」

「……やつと、お父さんのことと、ちゃんと話してくれたわね」

律子が笑顔になると同時に、涙が頬を伝つた。

「急におしゃべりになるんだもん。……びっくりするじゃない」

「……急にケンカもするようになつたしなあ」

「ばか息子」

笑いながら母親は田元をねぐつた。

それからというもの、織は毎朝、弼の家に遊びに来る“ふり”をし、半分は母親とおしゃべりを楽しみ、半分はゲームで時間を費やしながら、ずうずうしくも夕飯を共にした後自宅に帰つた。“ふり”をしていた。夜はどうするのだろうと心配する弼をよそに、彼女は恐ろしいことに一階の窓から弼の部屋に入り込み、夜中はずつとゲームで遊んでいたのだ。

そもそも自宅などというものが彼女にあらうはずもない。
「だつて、人間じゃないし」

弼はすでにそう判断している。ただ、人間ではないからといって忌み嫌つたり蔑んだりするつもりは毛頭ない。犬だって猫だって人間の友となるわけで、ならば異世界の者と友好関係を結んだところでおもおかしなことはないはずだ。頭に来れば怒ればよいし、寂しそうであれば慰めればよい。

「あれ、どうしてこんなことを思えるようになつたんだろう」
時折、考え方が急激に変化したことに対する自分でも不思議な思いをする。

織がこれまで弼にしてきたことは、一つの言葉ですべて片が付く。つまり「強烈な自己主張」だ。あの口調で何がしたい、これがしたい、と自分のやりたいことを、臆することなく、堂々と、そして悪びれずに、主張していく。

弼の我慢が限界に達した日、彼は織の要求に對して断固とした態度でノーと言つた。織は、自分の主張が通らないことにいらだちを覚えながらも、最終的には折れた。その日から、織の自己主張とケンカをすることで、お互に住みよい空間をつくることに慣れてきた気がする。

「ケンカするのが一番、つてことかね」

正確に表現するなら、手をつなぎながらケンカする、ということだろう。弼はそこまで理解をしたわけではない。しかし「コアンス」は掴めるようになってきたのだ。引きこもりだつた半月前に比べれば、ずいぶんな進歩ではないだろうか。

実は、今日から織は正式に明里家に下宿する。^{あかり}織の部屋は、弼の父親が使っていた四畳半の書斎を整理して使うことに決まった。

「着替えをしまえて、寝られればよい」

とは織の要求である。着替え？　一日中あの和服でいるんじゃないのか、と弼は疑問に思つたが、数日前に律子と織の間で交わされていた会話を思い出して納得した。

「織ちゃん、制服はどうするの？」

「制服？」

「学校に着ていく制服、はやく買つておかない？」

「……」

織は弼に目で「そうなのか」と聞いている。小さくうなずく弼。

律子は新たに娘が出来たようで楽しくなつてきたらしく、怪我で動けない弼をほつたらかして織と一人で制服を作りに出かけてしまつた。そして夕方過ぎ、弼が壁に手をつきながら必死の思いでトイレを済ませた直後、一人は笑いながら大きな買い物袋を抱えて帰ってきた。袋の中から織の普段着が山ほど出てきたのを見たとき、弼はまず母に呆れ、次に織に感謝した。

「僕では、母さんを笑顔にできない」

罪に似た引け目を、弼はまだ感じているのだ。

律子が「届いた」といったのは、サイズを合わせた織の制服だ。

弼にとつては見慣れた服装なので、特にさしたる感慨もないのだが、実はこの学校の制服はプレミアが付くほど女の子には人気の代物だ。学力が県内でも上位にいないと入れない高校のため、制服のためにわざわざ県立のトップ校を蹴つて入学していく女子もちらほ

ら見受けられるそうだ。そして、卒業シーズンになると高値で売買される、という悪習が生まれ、問題視もされている。

夏服は丈の短い白いブラウスの左胸に校章があしらわれ、首元にはグレーの短いタイが。そしてスカートは赤と黒とベージュのターンチェックという、少女性をむやみやたらと強調したデザインになっている。ステッチもカツティングもデザイナーが細心の意匠を凝らしており、くびれは細く高く、足は長く艶めかしく見える。

地味な紺のブレザーからこの制服に変わったのは、前理事長が就任した八年前からである。彼は相当すげべな人だつたらしく、理事長に就任した直後、女子の制服におかしな規定を設けた。

- ・ブラウスはスカートの中に入れて「はいけない」
- ・スカートは膝「上」5センチ以上
- ・靴下は「自由」。ニーソックスやストッキング「も可」
- ・タイは首元にきつく締め「ず」に第一ボタンを留め「ない」ことを推奨
- ・ピアス、アクセサリ類は禁止「せず」

心ある人は「制服パブか！」とツッコミを入れるそうだが、そんなことを知らずに入学した弱は、背伸びをすればおへそが丸見え、足をだらしなく開けばパンツが丸見えという女子の制服に、毎日目のやり場に困っている。

前理事長曰く

「学力で県内トップなら、服装くらい自由にさせてやれ」

「女の子は可愛くなればいかん。可愛ければ男は自然、彼女たちを守りたくなるものだ」

「制服が可愛くて誰に迷惑がかかる。下らぬ反抗心に時間を費やさせることより、学力に集中させたほうがよっぽど生徒のためである」と屁理屈をいってPTAと教育委員会をねじ伏せたそうだ。実際、彼が理事長になつてからというもの、県内のトップクラスの女子が

集まるようになり、かつその噂を聞きつけた男子がスケベ心で勉学を頑張る、という相乗効果が生まれ、私立？美学園は、全国でもトップの成績を収めるようになった。残念なことに前理事長が普段からあまりにもスケベすぎて、彼の手腕は全く評価されていないのだが……。

階下から織と律子のきやつきやつとはしゃぐ声がする。弼はひとまず居間に降りることにした。膝がまだ痛み、壁に寄りかかりながらでないと歩くことすらままならないのだが、ほとんど動けなかつた数日前に比べれば確実に快方に向かっている。小さな踊り場から下を見下ろしたとき、居間に織の制服姿が見えた。

おお……。

田鼻立ちもはつきりしていて華奢な体つきの織は、きっと？美学園の制服が映えるだろうと想像していた。なので心に準備があつた分、陶然とするまでには至らなかつたが、「かわいい」と見瀉れるには十分な立ち姿だつた。

「弼、どうじやこの姿」

織は褒めてほしいといつよりは、とにかく自慢がしたいだけしかし、得意げに見せつける。弼は素直に褒めるには心情が複雑で、先ほど「ヌシは使えぬ」と言われたこともあり、何か別の言い方でやり返したいと思っていた。

「……へえ。意外と……」

「ふふーん、かわいいじゃね?」

「……胸、あるんだな」

「胸……？ ハツ、乳のことか！ ヌ、ヌヌ、ヌヌヌシ！ 無礼にもほどがあるぞ！！」

「そりよ弼！ 女の子に向かつて何てこと言つの！ 気にする子は気にするんだから、少しテリカシーを持ちなさい！」

織を赤面させることと慌てさせることまでは計算通りだったが、律子を怒らせることまでは想像できなかつた。計に勝つて勝負に負けた感じだ。

実際、織は今までおかしな和服を着ていたせいもあってか、体型がいまいちわからなかつた。しかし体の線が出やすい夏服は、彼女のふくよかな胸を強調し、新鮮な驚きを感じていた弼だつた。あまりじつくり見るのもイヤらしいので、目線を外そうとした瞬間、弼は、おや、と織を再び見つめた。

顔はもとより首から鎖骨まで赤くした織だつたが、自らの姿を鏡に映しながら、律子に向かつて少し不安げに言った。

「しかし『母堂』。この服は股の風通しが良すぎる。それにずいぶんと薄着じやの。現世のおなじたちはこのように無防備な姿で平気なのか……」

「ふふふ、いまどきの女子高生なら、スカート丈はこれくらいで当然なのよ」

そう言いながら、律子は織のスカートの裾を引っ張り、腰の高さを調整している。

「うーん、確かに慣れないと短いからちょっと寒いかもしね……わね……し、織ちゃん!/?」

急に顔を赤らめて、慌て出した律子。その慌てぶりを見て、もしや、やはり……と同じように顔を赤くし出す弼。無駄に心拍が上がる。全身が熱くなる。

一方の織は全く気にとめた様子もなく

「なんじや

と能天気に聞く。

「あ、あ……あなた、下着は…?」

「下着とはなんじや

!! やはり……。

「ひつ……ひつ……あんたは部屋に戻つてなさいッ
!!」

律子の怒声に蹴飛ばされたように、弼は自室への階段を必死で昇る。

そして弼は、ベッドにもぐりこんで布団を頭からかぶった。

……さつき、ブラウスの上から透けて見えた、の……は……。

「 ッ！」

布団の中で悶絶する弼。

そういうえば、律子は、スカートを触りながら「下着は」と聞いていた。

「ま、まさか……。 アアアツ！」

弼は今夜、眠れそうもない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2492w/>

ユダメシキ！

2011年10月7日03時23分発行